

婦人の子死と毛

第五卷
第三號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、事項毎に別紙を用ひ、別口は住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子名も投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年三月二日印刷
同 年三月五日發行

總編輯 東京市麹町區飯田町四丁目十二番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北陸館

婦人と子ども 第五卷第三號目次

子ども

けだもの會議……………やまとの翁…一
 春三と「赤」……………おきな…二三
 和藤内の遊び……………おきな…二七
 勇ましい少女……………太田龍東…二八

婦人と子ども

幼児依托所……………牧 羊…二六
 子どもの病氣につきて……………ひむかし…二九
 割烹……………石井泰次郎…三三
 家庭教育所感……………飯塚忠二郎…三三
 貞一の日記……………その母…三五
 ありのまま……………和歌子…三六
 六花紛々……………りうとう生…四一

雪ついで……………つねを…四八
 俳句披露……………平岩學洋…四九

家庭とは何ぞや……………五〇

讀書の棗……………五一

河野嬢よりの書面……………五二

九州地方の状況……………久保やま…五九

佛國婦人の夜業……………六二

會食中の談話……………六三

婦人と齒……………六三

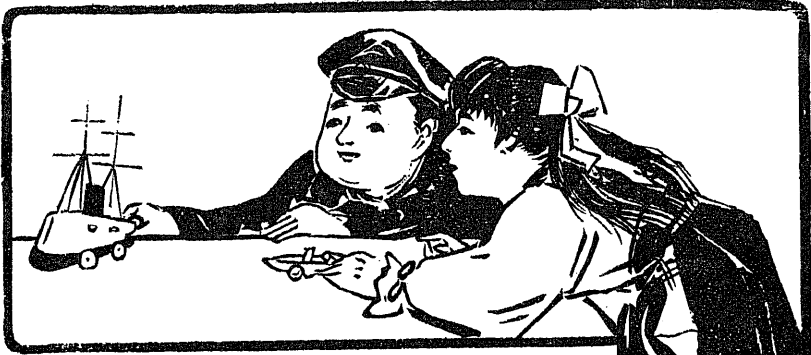
保育者のため

幼稚園の遊戲……………松村ひさ…六四

大阪市の保育界……………しつ報…六六

雑報……………六六

會報……………六九



もど子と人婦

第五卷第三號

けだもの會議

やまとの翁

さて、前に申しました通り、虎だの、猿だの、犬だの、議論が出て、夫に賛成するものだの反對するものだのも澤山出ましたもんですから、會議が、丸で、がやくになつて仕舞つて何が

何やら、さっぱり分らなくなりましたから、會長の象も、どうしていゝやら、殆んど困ったといふ風でありましたが、暫らくすると、向ふの方から、

「會長々々、緊急動議があります」

といつて立つた者がある、誰かと思つて見ると、夫は野猪の親類の豕でありました。

「え、前程から承はりますと、いろくの御名論が出まして、一向相談がきまるといふ譯に行かないのは、とりも直さず、各自、自分の都合のよい方に許り考へて議論するからで、即ち自分の田に水を引く事許りやっているからだと考へます。そこで、私の考へますには、之は、吾々仲間で、この様に議論して居て

は、何時まで、たつても決まらないと思ひますから、一層、他
 の社會のものを呼んで來て決めて貰うては、どうでせう」

會長なる程、夫はよいお考へだ、皆さん、今の豕君のお説に賛成の
 方がございますか」

と聞くと、皆夫に賛成しました。そこで、誰を呼んで來ようかと
 云ふ相談になつた。すると、鳥だの、魚だの、虫などの様なもの
 に來て貰つては、どうもけたもの社會の名譽に關はるといふので、
 またいろいろ議論があつた末、とうとう會長の象が發議して

會長、夫では、どうです、一層人間の中で、誰かに來て貰つては、人
 間である、と、別段に吾々の利害に關係しないから、極公平に判
 断して呉れるだらうし、又吾々の名譽にも關係しないでせう」

といふと、大勢は「夫で宜からう」といふので、とうく人間に來て貰ふことに決りました。

そこで、誰が使に行くかといふと、駈けるのでは一番だといふ馬が行くことになりました。

そこで、暫らくの間は休憩といふので、皆席を離れて水を飲んだり、草を食ったりして、一時間許りたつと、お使の馬が、一人の人間を乗せて、タツタツタツと駈け戻って來ました。

そこで、象が直ぐ面會つて、委細の譯を話して、さて大勢のけたものに紹介しますと、其人間は、席の眞中に立って、

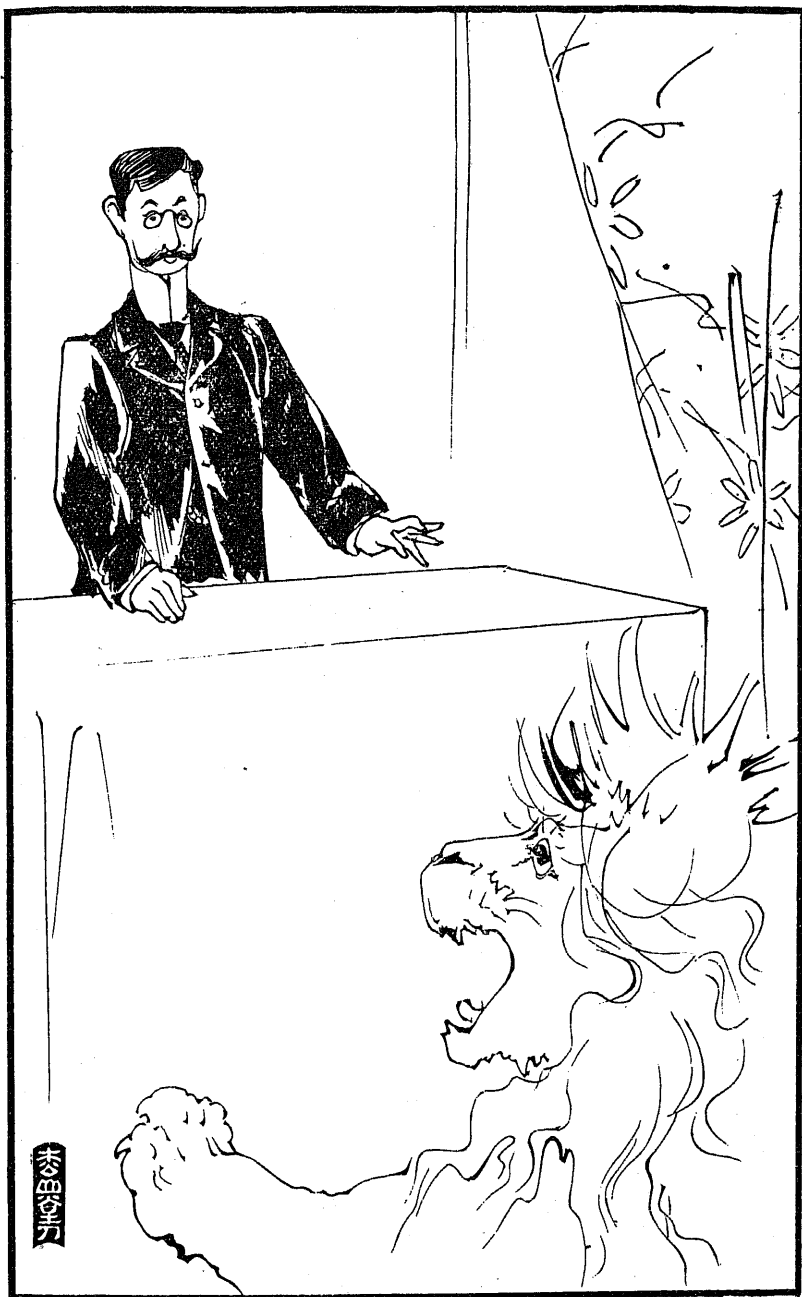
人間では、皆さん、折角のお頼みですから、之から私が一つ、今晚の問題を決めようと思ひます」

と、挨拶しますと、今迄騒いで居た連中は、忽ち静まり返って、ひっそりとなつて仕舞つた。すると、一方の隅から山も破れる許りの大聲で

「一寸、質問する」

と怒鳴り出したものがある。其聲の凄いことと言つたら、中々前の虎どころの騒ぎではない。大勢は、何者だらうと吃驚してふり返つて見ると、最初から、眠つて居たかと思ふ程、一言も言はなかつた獅子でありました。皆さんも御承知の通り、此獅子は、昔から獣の王といはれて居るのでありますから、大勢は、「さて何事であらう」と謹んで聞いて居ると

「今迄、吾々の相談がきまらなかつたといふ譯は、つまり、各自



其標準とする所が一致しないからである。そこで、今改めて、人間君にお尋ねしたいのは、どういふ標準で、吾々獣社會の階級を定めてくれるのか、夫を一言お尋ねして置きたいのであります」

と、いって、其ふさくした鬣を一ゆりゆすって、人間をぐつと睨んで立ったのであります。すると、人間は

「夫は、いふまでもない、我輩に頼んだのだから人間の眼で見、人間社會に有用なといふことを目安にしてかよって、人間に一番利益のあるものを上に据えんければなるまい」といふと、獅子は奮然として

「夫では僕は反對だ」

八
 といつて席に即きました。すると、一方では、第一番に馬が「賛成
 や々」といって、「僕などは、人間の爲に、どの位働いてゐるか知れ
 ない、第一、今度の日露戦争で、騎兵だの砲兵だのが、あんな勇
 敢な働きの出來るのは、全く僕等の力だからなあ」といふと、其隣の
 牛が「そうとも、僕等は毎日、畑を耕やしたり、夫に、身體まで
 人間の爲めに食べさせて居る位だもの、若し僕等がなかつたら、
 人間社會の食べ物がなくなる位だ、人間君の説は尤もの事だなど
 といつてると、豕だの、犬だの、猫だの、駱駝などいふ連中は何
 れも賛成や々といつて居る。
 すると、片隅の方では、鼯鼠だの、鼠などが出て大反對を稱へ出
 しました。先づ鼯鼠のいふには

「僕は、そんなのには甚だ不賛成だ、そういふ側からいはれると、僕などは、たゞ皮が火打袋になるといふ丈けで、其他は畑を荒らしたり、人間に害になること許りだから、一番下になる譯だ、そういふ議論は不公平だ、私は、獅子さんと同様反對です」といふ、すると、鼠だの、狼だの、山犬だのは何れも、夫は尤もだといふ。そこで、議論が、又メチャクけになりかゝった、すると、獅子は

「いや、私の賛成しないといふのは、今鼯鼠のいった様な、そんな簡単な譯からではないのである。一體、最初から、此會議で以て、吾々の階級を定めようとするのが間違つて居ると思ふ。階級などつけて、夫が實際何の爲になるのであるか、第一、夫

が分らないではないか、なる程、吾々仲間の間には、十
 身からだ體だの大おほきなちひなものも小ちひさいものも、力ちからの強つよい者ものも弱よわい者ものも、人にん間げんに爲なる
 なるものも爲なるにならぬ者ものもあるに違ちがひない、然しかし、夫それは各おの自づ、天てん
 から與あたへられた其そのものゝ本もと性せうであつて、何なにも、力ちからが強つよいから上うへ
 に立たつとか、弱よわいから下したになるとか、又また人にん間げんの爲なるから上うへ
 に在あるべきだとか、爲なるにならんから下しただといふべきでなからう。
 つまり、各おの自づ以もつて生うまれた天あま性せうを十分ぶんに盡つくすものが一番ばんよいので
 ある。だから、馬うま君くんだの牛うし君くんだの犬いぬ君くんなどは今迄いま通まり音ねなし
 人にん間げんの爲なめに働はたらいて、戦せん争そうに出でるなり、畑はたけへ行ゆくなり、或あるは門かど
 を守まもるなり、各おの自づの職つとめをして行ゆけば夫それで宜よろしいし、又また鼯むやう鼠そ君くんな
 ども、仕し方かたがない、今迄いま通まり畑はたけの中なかを荒あらして居ゐればいゝし、

鼠君も、まあベストなどは持つて来ないまでも今迄通り天井で騒いで居ればよいではないか、つまり、皆其職分がちゃんとして天から與へられて居るのだから、何も、夫に上下の階級をつけることもいるまいと思ふのだ」

雄辯滔滔々として演説をした。

前程から黙つて獅子の演説を聞いて居た人間は、此時立ち上つて「諸君、只今の獅子君の御演説は、まことに筋の正しい立派な議論だと思ひます。何も始めから、上下の區別をつけなくつても各自其職分を立派に盡して行けば夫で宜しいので、其職分といふものは、天から與へられたものだから、夫に上下の區別はないといふ議論は、まことに正しいお説と思ひますから、どうで

す、此會議は、此儘で解散しましては、

といひますと、大勢のけだものは、何れも、「贅成々々」なる程、も
つともだなど言つて、そこで、とうく、けだものゝ階級をきめ
るといふことは已めにして、其儘、各自の棲家へ歸つて仕舞ひま
したとさ

めでたしく

春三と「赤」

おきな

春三は、北の方の國の山中の一軒家に住つて居る
 或る農夫の一人子でありました。山中の一軒家
 ですから、村から遠く離れて居て、其家から村へ行
 く道も、峻しい山や坂やを越えて行かねばなりま
 せん。

或夜、春三のお母さんは、急に病氣が起りましたので、お父つさんは、直ぐ村のれ醫者の所へ行つて薬を貰つて來ようとした。すると春三は「れ父つあん、私の方がお父つあんよりも村へ行く道をよく知つて居ますよ、夫に「赤」さへ連れて行けば大丈夫だと思ひます。どうか、私をれ使にやつて下さい、そして、お父つあんは家に居てお母さんの番をして居て下さいまし」

「赤」といふのは年久しく飼つて居る此家の犬です
 が、行儀よく庭に座つて、そしてお父つあんの顔
 を見ては尾を振つて居ます、其風が丁度
 そーですとも、お父つあん、僕は、ずん／＼道案
 内して行きますから、どうか、春ちやんと一所に
 やつて下さい」

といつてる様に見えます。

相憎其晩は、空が一面にかき曇つて、雪はいやが
 上にも降りしきつて居るので、お父つあんは如何
 にも險呑に思つて、春三を出したくはなかつたの
 ですか、餘り何度も／＼も言つて己まないの
 とう／＼春三を使にやることに決めました。

極く小さい時から、此山に住んで居るので、春三
 は、道には慣れて居ますから、すぐ家を出ました
 すると「赤」も後れないで一所に飛び出しました、

この寒い雪も風も一向平氣なもんで。それから、直き村に着いてお醫者に會ふことが出来ましたから、すぐお藥を頂いて、大喜びで家に歸りかゝりました。

「赤」はいつも、前に立つて、よい道を案内してビヨイ〜と歩いて行きます、所が、平素から極く危い道の所に來て、「赤」は急に立ち留つてしきりに、そこいらを嗅ぎ回はして居て一向進みません。

「赤」行かないか」

といつて見たが、赤は動かない。

「そら、あそこに森の中から、燈が見える、あれが家だよ、さー急いだ〜」

と言つて見たが、今迄一度でも主人の命令に背いた事のない「赤」は此時丈は、どうしても言ふて



とを聞きません、仕方がないから、春三は「赤」が無闇にうなつて注意してくれるのも構はずに、自分前に立つてずん／＼上つて行きました。

所が、僅か二歩三歩進んだと思ふと、忽ち、底の知れない崖下へ足踏み滑らせて、雪と一所に落ち込んで仕舞つたのです。

さて、其晩もだん／＼遅くなつたが、春三はまだ歸つて来ないので、家では、お父つあんが急に心配し出しました。待つても待つても歸りそうにもない。

「ひよつとしたら、お医者さんがお留宅で、お歸りを待つてるのではありますまいか」

とおつ母さんは言ひました、餘り歸りが遅いのでもう自分の病氣も忘れて仕舞ふ程、お母さんは春

三の事を心配して居ます。

所が、もう彼れ是れ、夜中の十二時も過ぎたと思ふから、門口で忽ち「赤」の聞き慣れた聲で吠え立てるのを聞いたので、

「やー、春は歸つたな」

とお父つあんも、おつ母さんも一所に叫びましたそして、お父つあんはすぐ飛び上つて、門口を開けました、春三がそこに立つて居るに違ないと思つて、

所が、吃驚しました、「赤」二人つ切りで、春三の影も形も見えません。そして「赤」は、しきりに悲しそうな聲で鳴いて居ます、

「あなた、春は雪で埋れて死んだんじやありませんか?!

おつ母さんは床の中から伸び上つて、お父つあん

に言つた、お父つあんは暫らくは自分の動悸の靜まるのを待つて黙つて考へて居ました、やがて「赤」の首つ玉に、藥瓶が結び付けられてゐるのを見付けて、忽ち夫を手に取つて

「なーに、お前大丈夫、生きてるよ、こら御覽手拭で「赤」の首に藥を結び付けてるじやないか、多分、雪崩れで深い所へ落ちたのだろが、大丈夫生きて居るのだ、では、己はすぐ今から、「赤」

に案内させて行つて来るよ、といつて、お父つあんは用意して直ぐ出ました。

「赤」は、大喜びの風で、又前へ立つて、とつとと、進んで行きます。

さて、「赤」はだんぐと元の道へ案内して行きましたが、春三が落ち込んだ崖の所へ来て、急に険しい側道へ下つて行きます、道が険しい上に、大

雪と来て居るから、其危い事と言つたら中々一様ではない、お父つあんは何度か足を踏み滑らさうとしては、水柱の下つた木の枝につかまつて漸助かつた位。

やつとの事で、崖下の谷底へ下り付いたから、お父つあんは、方々を見回しては

「春や、春や」

と呼んで見たが、答もなければ、影も見えない、すると「赤」は其谷底でも、まだ一番どん詰めの岩の下まで行つて、しきりに兩足で、雪を掻きはじめました、「はてな」と思つて、お父つあんも一所に、雪を掻き退けて探した所が、とう／＼、其中から、春三の死骸が出て來ました。

お父つあんは、大急ぎで、春三の血だらけになつた冷たい衣物を脱がせて、そして自分の温かい衣

服きぬの中なかにくるんで、大變たいへんな骨折ほねをりりをしてやつと、上うへに持つて来て、大急おほいそぎで、家うちへ歸かへりました。夫それから、家うちへ連れて来ておつ母かさんの床とこの中なかに入いれて、いろ／＼手てを盡つくして介抱かいぼうした所ところが、まわ、どんなに辛さび事じでしたらう、漸しげろくくすると蘇生いしかへつた、そして細ほそく兩方りょうほうの目めを開あけて、一生いつしやうゆんわい懸命けんめいにおつ母かさんの顔かほを見みつめて、

「おつ母かさん、お薬くすりが届とどきましたか？」

これが、春三はるさうが蘇生いしかへつて始はじめての言葉ことばでありました。後あとで、だん／＼聞きいて見みると、彼あの時とき春三はるさうが崖がけに落おちち込こむと、「赤あか」はすく其後そのあとに飛とび下くだりて來きたので、春三はるさうは、やつとの事ことで、薬くすりを手拭てぬぐひでシツカと頸くびに結むすび付つけて、家うちに歸かへらせたのであつたといふ事ことです、所ところや顔かほや手足てあしに怪我けがをしました上に、非常ひじょう

の寒さむさの爲ために、一時死いちじしんで居ゐたのですが、其傷そのきずは皆急所みなきしよを外はずれて居ゐりましたから、幸さいはひに蘇生いしかへつたのでありました。

和藤内遊わとうないあそび

おきな

これは、和藤内わとうないと、和藤内わとうないのおつ母かさんと、虎とらとの遊あそびであります。

先まづ、真中まんなかに障しやうじを一まい枚た立て、置おいて、障しやうじの兩側りやうはに甲乙二人かうちうにんが隠かくれて居ゐる。残のこりの人は、其二人そのふたりを一時いちじに見みることの出來できる様に、障しやうじの眞正まっしょう面めんに立たつて見みて居ゐる。そして二人ふたりが用意ようい齊せいつたと見みた時ときに、誰たれか一人眞正まっしょう面めんに居ゐる人ひとが、一二三いちにさんと合圖あひづをする。

其合圖そのあひづに従したがつて、例たとへば甲かうの人ひとは和藤内わとうないになつて

何か杖の様なものを振り上げて、虎を打ち殺すといふ身構ひで、そつと障に沿つて正面へ顯はれて来る、すると片側に在る乙は、和藤内のおつ母さんの積りで、杖をついて、よつち〜と歩いて来る、そして、互に正面の障の端の處まで来て、バツタリ出遭ふと、和藤内は負になる。

今度は甲が虎になつて、のそり〜と這ひ出てくる、そして、乙が、和藤内になつて、刀を振り上げてやつて来てバツタリ出合ふと、今度は虎が負けになる。

次に、甲は、おつ母さんになつて、乙は虎になつて出て来ると、おつ母さんが負ける。

この様に、三度續けて負けた所で、一勝負決るといふことになるのですが、この遊で、必要なことは、障子の陰に居る時に、對手は、今度何になる

十八
であらうかといふことを考へて出ることで、對手は屹度おつ母さんになつて出るなと思つた時は、自分は虎になつて出て行くといふ風にするので、試みにやつて御覽なさい、中々、面白いです。

勇ましい少女 (つゞき)

太田 龍東

それで、菊枝は玄關先の隅に刀を抜いて、今か今かと出て来るのを待つて居りますと、一人遣つて参りました。まさか自分を斬るやうな者が、待伏せしてゐやうとは思ひませんで、大きな柳行李を擔いで、重そうに暗い所を足探りしながら、酒の酔ひで上機嫌となり、獨り言を云つてゐます。「この行李は何が中にあるか知らねーが、馬鹿に重いや、ゲン、ドッコイ〜氣を附けねーと危

險いぞ。こゝらに何でも階段があつたけな。』
 この獨言を言ふのが、菊枝に取つては大
 そうな便宜でありま
 す。もし無言つて通つ
 てしまへば、暗くて知
 れにくいのであります。
 菊枝はその言葉を使い
 に、足音のせぬやうに
 側により、腰の邊りと
 思ふ所を、腕一ぱいに
 力を込めて、岩をも通
 れと斬りつけました。
 盗賊は、不意に腰を斬



られましたので、行李を
 前に投げ出し、その儘そ
 こに「キヤツ」と叫んで倒
 れました。
 菊枝は、案外無造作に
 參つたのを喜びまして、
 尙ほも續いて斬らうと思
 ひましたが、何分眞闇で
 少しも解りませんので、
 そのまゝ様子考へてゐ
 ますと、盗賊は、餘程深
 く斬られたと見へ、倒れ
 たまゝ起き上らないで、
 「ウーン、ウーン」と苦叫
 てるます。

すると又一人の盜賊が、こゝへ遣つて來ました。

この盜賊は大きな風呂敷包に、品物を一ぱい入れ

て、之れを背負つて玄關前まで來ますと、「ウーン、

ウーン」と云ふ聲が聞へますから、

『オヤ、こんな所に「ウーン、ウーンツ」つて、

何してゐるのだ。』

とその側に寄つて見ましても、返事もしないで、

只「ウーン、ウーン」ばかり云つてゐますから。

『手前何んだな、酒に酔ばらつて倒れたんだね。

ハハハア、そんな意氣地の無ことで、盜賊が出來

ると思つてるのか。オイ早く起きねーかよ。』

いくら云つても、返事もしなければ起きもしま

せんから、探り探り近寄つて起さうとする所を、

先程から狙をすましてゐた菊枝は、靜かにその前

へ廻つて、脚と思ふ所を横に斬り附けますと、盜

賊は向ふ脛を斬られて、バツタリ倒れてしまいま
した。

菊枝は荒男を二人までも、難なく斬り附けまし

て、自分ながらも其案外な働きに感心します。そ

の今迄の働きに、身体は疲れてしまい、重ねて斬

る勇氣はなくなりまして、その場に腰を下して息

をつきました。

向ふ脛を斬られた盜賊は、先きの盜賊のやうに、

腰を深く斬られたのとは違ひ、命に別條のあるや

うな傷ではありませんから、聲を出すには少しも

差支ありません、それですから、斬られるとすぐ

に、大きな泣き聲を出して、

『オーイ、助けて呉れツ、盜賊だ、人殺し、人殺

しツ。』

なんて、自分が盜賊でありながら、人の事を盜賊

呼はりしてゐます。

菊枝は、又氣を確つかりと持直し、その盜賊の側に寄りまして、

『盜賊さん、お前を斬つたのは妾だよ、この家の娘の菊枝ですよ。』

と云ひますると、之れを聞いた盜賊は驚いて

『な、なに己れを斬つたのは、この家の、あのこの家の娘だへ、よくもこんな酷い目に逢せよつた、わア痛たゝ、をのれッ。』

と云ひながら、菊枝に手向ふといたします。

そこで菊枝は、

『よくもそんな事が云へるね、自分の方から先きに酷い事を謀反でいながら、悪るいことをすれば悪い報いが来るのは正當ぢやないか、それは天罰だから仕方がないよ、恚爲死ぬなら妾の手に掛つ

てれ死によ。』

と云つて、刀を持換へ、今や一討にせうとする途端、後から菊枝をグイと抱へて、兩腕の動けない程、強く搾めたものがあります。

皆さんこれは、何者でせう、云はずと知れるでありません、残つてゐた一人の盜賊であります。

先程から大きな聲で「人殺し人殺し」と叫びましたから、この盜賊が、このことを知つて、菊枝を

後から抱へたのであります。抱へられた菊枝は、少しも動くことが出来なくなつて、全く自由を失つてしまいました。那麼もその筈で、大きな男が

力任せに、引き搾めたのでありますから、いくら勇ましいと云つても、僅か十六の少女でありますから、身動きも出来ないのは、無理もありません。

愆うなれば、菊枝は最早殺されるより仕方ありません。愆爲殺される覺悟で蒐つたとは申しまして、考へて見れば殘念ではありませぬか、難なく二人まで斬り附けて、今一人の事になつてから生捕にされたのでありますもの。と云つた所で、愆うなればもう駄目でありますから、菊枝も諦らめて、殺される覺悟になりました。すると盜賊は

『甚麼な奴が來たかと思や、この家の娘ぢやねーか、よくも己れの兄弟を二人まで遣つ付けよつた、尼つ女、兄弟分の仇だ覺悟しろッ。』

といかにも悪々しげに申します。

『妾は二人まで殺したから、もう諦らめて死ぬよ。』

さあ早くお殺し。』

と少しも恐れる色なく、判然と申しますと、盜賊

は、

『よくも覺悟した、さあ命は己れが貰つたぞ。』

と云ひながら、左手に菊枝を抱へ、右の手に刀を持ちまして、喉笛見かけてグザと刺し通さうとしました。

この時恰度、父の良正は歸つて參りました。この様子を見ると、すぐ飛び蒐つて、エイと一聲叫んだと思ふと、盜賊は筋斗打つて大地にドシンと投げ飛ばされました、起き上らうとする所を、良正は刀の折れるほど眉間を斬り附けました。それでその盜賊は、頭を二つに破られて死んでしまいました。

先きに向ふ脛を菊枝に斬られた盜賊は、尙ほも「人殺し、人殺し」と大きな聲で叫んでゐます。良正は之れを見るや「己れ」と云ひさま一刀の

本に斬り伏せてしまいました。

話しが少しく變つて参りますが、父良正の事を一寸述べませう。良正は、お巡りさんに連れられて四五丁行きますと、お巡りさんは

『私は用事があつて、少しく他へ廻つて行くからお前は一足先きに警察署へ行つて下さい。』

と云つて、何所かへ行つてしまいました。それで良正は變だとは思ひましたが、一人で警察署へ参りますと、什麼でせう、警察署では呼び出した覺へはないと申します。實に馬鹿げてゐますが、仕方がありませんから、歸つて参りました。

道々考へて見ますと、先きのお巡りさんは嘘のお巡りさんで、私を呼び出してゐいて、後で何か悪いことでもするのであるまいかと思はれません。恚う考へると、宅のことが心配でなりません。

から、急いで飛んで歸つて見ますと、いまの有様であつたのであります。

良正が、盜賊を斬つた時には、菊枝は氣絶して側に倒れてゐました。そこで良正は菊枝の身体に傷でもないかと、よく見ましてもありませんから、安心して氣附薬を吞ませますと、菊枝は息を吹き返して來ました。

良正は喜びまして

『オ、菊枝死なないで居ましたか、わアこんな嬉しいことはない、氣を確かり持て、お父さんが歸つたからもう大丈夫、盜賊は皆殺してやりました、して妹の重適は何處した。』

と尋ねますと、菊枝はお父さんの顔を見て、餘りの喜しさで返事も出來ず、『お父さん』と一言云つたばかりで、父を抱へて喜し泣きに泣いてゐます。

父は、菊枝の命のあるのを見て、一安心はしませんが、重酒の姿が見へませんから、それが氣に蒐つて堪りません。

『菊枝妹は何處した、重酒は何所にゐるか、コリヤ菊枝、重酒は何處しました。』

と急ぎ立て、聞きますと、菊枝は漸く口を開きまして、

『妹は、押入の中に隠しておきました。』

と一つ息で答へました。

『オー、不錯か、重酒は押入の中か、』

と云ひまして、菊枝の手を引いて行つて、押入を開けて見ますと、重酒は中に小さくなつて震へてゐます。父は之れを見て、急いで抱き上げ。

『爾も無事であるて呉れたか、わア有り難い、こんな嬉しいことがあらふか。』

と三人が喜んで、しばらくは無言で、顔見合せるばかりでありました。

皆さん、三人が今の喜びを考へて御覽なさい。

こんな喜ばしい悦れしいことが、亦とないだらふと思ひます。とてもこの有様は、私のやうな筆では書き表はすことが出来ませんから、こゝには書かないで、皆さむのお考へに任かしておきます。

しばらくしてから、父は菊枝に今夜の出来事の様子を聞きますと、菊枝は一什始終を話しました。父は菊枝の動きを聞きまして大に感心いたし、

『よくもそんなに勇ましい動きをしました、爾の今夜の働きは、とても男でも及びません。よく遣つて呉れました。』

と云つて賞め、扇を舉げて躍つて悦びました。

このことが世の中に知れて、いかなロシヤの新

聞でも、大さう賞めて出しました。四五日たつと、ウラジホストツクで一番金持の人が、菊枝を子に呉れと云つて参りましたが、良正は遣らないで、ますく之れを可愛つて育てました。

その後、日露戦争が初まつた時、この三人は、日本へ歸つて來たと云ふことであります。

(おしまひ)



お寺でらのぶつだんに、そなへておいたおちんが、いつのまにか、なくなつていたので、おしーさんは、このかなほとけがくつたのだろーといつて、いしだんへ、なげつけたらくわんくといひましたと

婦人と子ども



幼児依托所

入學前の幼兒の教育を司る最も自然の教育者は、母親であつて、自然の教育所は家庭であることは、こゝに改めて言ふまでもない事である。故に幼兒の教育は、全く之を自然の教育者の手に委すべしといふことは尤もの事である。然しながら社會の事情は世間多くの母親をして此尊むべき自然の天職を十分盡す事は、能はざらしめる場合が多くなつて來る。此頃は下層の勞働者に極めて普通の状態となつて來る。即ち日々の生活の爲めに忙はしい所から、自分の子供の教育さへ十分に盡す事が出來ない様になつて來

る。自分の子供の世話をしようか、生活の資を十分に得ることか出来ない。生活の爲めに十分働かうか子供の世話をする人かない、而しなから、親子食はずに居て、餓死を待つよりは、仕方ないから、子供は全く放任して生活の爲めに働かねばならぬ。こうなつて來ると、子供の現在の不幸は、言ふまでもないが、其將來の運命はまたまことに憫むべきのみならず、實に國家社會に取りて一大不幸を見るに至るのである。

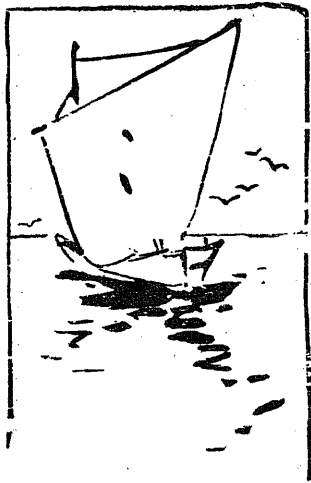
是に於て、之等の勞働者の子供の現在の境遇を幸ならしめ、其將來沈淪すべき不幸の境界から助け更に國家社會の福祉を増進せんかために、晝間、父母か生活の爲めに働く間丈、其子供を收養し家庭に代はつて其世話をしようといふ施設か、外國などに甚だ多く出來て來た。即ち、幼兒依託所 Kinderhe-wahlanstaltung 幼稚學校 Kinder-Hehule 或はクリッペン Crippen などいふものは、皆其目的の爲めに出來たもので、何れも、一年未滿から、入學するまでの間の間の幼兒を、朝から晩まで親切に世話をして與へるのである。父母は、毎朝働かきに出掛けて其子供を連れて此處に置き、毎夕、仕事の歸りに、此處から伴うて家庭に歸つて行く。

一方に於ては、子供の心配は費らぬから、思ひ切つて十分働く事が出來、一方に於ては、其子供は十分に保護養育を受け、現在の境遇將來の運命と共に幸福ならしめることが出来る。

翻つて我國現今の社會的狀態は、下層の勞働者の生活漸く困難ならんとして、然も、此の如き施設

設は一も見る事が出来なかつた。然るに、客年日露戦争の事起るに當つて、國內に於て種々有益な後援的事業の起つた間に、更に注意すべきものは、出征軍人遺族の困窮者の幼児を收養して、其母親の職業を十分ならしめる目的の幼児依託なるものが、こゝ彼處に起るに至つた事である。現に神戸には既に三ヶ所か開設あり、東京に於ても、京橋の朝海小學校の施設したるもの外二三あるといふことである。吾人は、大に此舉を賛すると共に此の如き施設の尙益々増加して、單に、此の時機だけでなく、之を機として一般労働者の幼児依託所なるものが、起らんことを切望するものである。

(牧 羊)



子供の病氣につきて

ひむかし

「禍は口から出で病氣は口から入る」といふ通り大底の病氣は食物から起ります。子供は一切の機關が十分發達して居ませぬから、いろ／＼の病氣に侵され易いものであります。別して離乳期以後は食物に依つて起る病氣が多いのは事實であります。即ち下劑は小兒に最も起り易い病氣でしよう。而して此病氣の危険なことも申すまでもありません。哺乳期の間専ら母親の乳を食物として居る時は、まだ割合に此病氣の危険が少いのです。が、一旦、離乳期に達し、さて、いろ／＼の人工的の食物を與へる時が、一番注意しなければなりません。或人は「なわに小供なぞは餘り注意し過ぎると反

つて弱くなるから、打放つて置くに限る」といひますが、これ程劍呑な事はありません。勿論、寒からうと云つて、無闇に厚衣をさせて反つて皮膚を弱くさせたりなどする事がありますが、これは反つて衛生上の智識が足りないやり方で、注意するといふよりも寧ろ不注意といつて宜しいでせう。「食べ物なぞも、餘り氣をつけては行かない」といつた所で、一年位の子供に、甘薯だの、餡の菓子なぞを食べて御覽じろ、すぐ下劑を始めます。「そんなら下等社會の子供などはどうか、随分食べ物なぞも亂暴にしてやつて、それでわんなに達者でないか」といふかも知れぬが、これも間違で、小兒の死亡の比例は、下等社會が一番多いのであります。大抵はこの「亂暴な育て方」で死んで仕舞つて、やつと残つて達者で居るのは、即

陶冶せられて残つてゐるのだから、割合に強いのであります。

だから、子供の人工的食物に向つては出来るだけ注意しなければなりません。一般の衛生の原則は、食物を味よく且つ消化し易く調利して食するに在る、大人でも然り、まして消化機能の十分完全でない子供の食物に於ておやであります。

さて、幾ら注意しても、病氣は仕方がない、思はぬ注意の不足から起る事があります。此時は尙更ら食物の注意が肝要です。大抵子供の下痢は、初發の時は、自然療法、即ち食物だけを注意して行けば、強いて服薬しないでも直るといふ話です。大人の病氣でも一に看病といふ位、まして子供に在つては、發達の機能が盛でありますから、大抵までは自然療法で濟むものらしいです。

さればといつて、醫者には是非診察はして貰はねばなりません。私の言ふのは、薬よりも、醫者に相談して食物を嚴重にせよといふ事でありませぬ。私は昨年九月から、子供を下痢症にかゝらせて、彼れは五月計り直りませなんだ。一時は殆んど危いとも思はれましたが、幸に元の健康に復せしめ得たのは、醫師の懇切なる指導の下に、食物に向つて十分注意を拂つた結果だと信じます。



割烹

石井泰次郎

春の菓子、春の酒菜の拵方のみにては、あまりに時勢にとほざかる、とのこいとも有るべければ、こたびは、西洋料理の傍觀筆記を一つ、三月はじめの御馳走になさんとして、

◎ラプステーンフレの拵方

原料

- 伊勢海老 十尾
- 鹽 二十匁
- メリケン粉 八十匁
- 水 七勺餘
- 鶏卵 五箇
- 鹽 四匁
- へツト 一斤

伊勢海老を、湯の煮たちたる鍋に（湯三升に鹽二十匁入れたる湯）鹽を入れて、次て海老を入れて能く湯をかぶる様にして、蓋をして、二十分間煮て、箸へあげて、水をかけて冷して、切板の上にて、左手に尾の方を手前にしてしかと押へて、出刃庖丁にて切かけ、次に尾の方を向にして、頭の方を手前に向けて押へて、出刃庖丁にて切かけて、うらがへして、頭と尾とのつがひの所を、頭の方を向にして、庖丁の先にて、切めぐらして、再びおもてを上にして、兩方へ胴のからを剝去て、頭と尾とを引はなして、次にからを皆剝て、身を出し。二つに前の切かけの所より切て、上のみそのつきたる所か、庖丁刀にてこきり、少しきり去りて、身を五分位づゝに小口切に切りかくべし。

○衣の拵へかたは、メリケン粉を鉢に入れて、

玉子の黄味を入れ、鹽を入れて、水二勺ほど

入れて、摺子木にてこね合せて。(こね方は味

噌をする様にぐるぐるとめぐらしてはあし

し、めぐらさずに、向より手前へ手前へと、

たいませ合すべし。)

鶏卵の白の方は、泡たてにて泡をたて、(二分

間)あき、右の玉子あはせたる粉の中に入れて

木杓子にて合すべし。二分間とは、泡たつる時

間を記したるなり、泡立きかなくなれば、箸あま

たにても、又は箒を以て、白味を平き鉢に入れ

て底にて搔たてゝも立つなり。

○右出来たらば、

ヘット油を鍋に入れて、煮立てゝ(あまりつよく

煮たつべからず)少し煮たてゝ用ふべし。

○泡たてたる玉子の白味を、前の粉と玉子と合

せたる汁に入れて抄子にて搔合せたるを、小

き器に少し取分て(海老を先に入れ、次に衣

となす粉を取分るなり)くるみて、油に入れ

てあぐるなり。油はわたらしきを用ふべし、

あぐる時、箸にてかへしかへしながらあぐるな

り、四分にしてあがるなり。あがりたるを、西洋

紙を皿の上に敷たる上に取上て、油を切るべし。

大きさは、海老の中心なるを、一人に一ツあ

ての大きさをなれば、一寸大きなり、

あぐる油の、つよくきかぬやうに心してする

が肝要なり、黒くならぬやうにすべし。

油の煮えすぐる時には、他の油をさして、温

度をいつも同じやうにしてあぐるなり

家庭に於ける所感 (承前)

長野市 飯塚忠次郎

(三) 小兒と樂書

小兒がよく筆、鉛筆、白墨、なんぞで、壁や板屏
 などに樂書(いたずらがき)を致しますのを、まゝ
 見受けることで御座いますが、これは甚だわるい
 風習と存じます、一寸戶外へでて少し注意してあ
 るいて居りますとめにつくことで、家屋の白壁或
 は板屏に鉛筆だの白墨で以て色々樂書がして御座
 いますのを御覽になりましようが、皆様はどのよ
 うな感じがあらかびなさいますか、そして如何な
 る事柄が重にかきつけられてあるかと申せば多く
 は人の悪口で御座います、よけいなことかはしれ
 ませんが一寸かいてみますと、「次郎の大馬鹿三太
 郎」なぞとお話しになつたものでありません、そ

ればかりではなくなかにはよむにたえないことが
 かきつけてあるのです、あながちに悪口ばかりに
 もかぎりませんです、種々様々な書などかきちら
 して、見るも心くるしい次第で御座います、他人
 の家屋の白壁や板屏ばかりにららがきをするかと
 思ふとそうではないので、自分の大切な教科書へ
 もよくいたづらがきをするので御座います、此様
 なことをする小兒には何卒各自の家庭にをいて、
 嚴に其わるいことであるといふことをよくいゝ
 きかせて、こんなわるいふうにならぬように、
 また、こんなまねをしないように、平素から教導
 せられたいことです、これは單に小兒のいたづら
 なくさみにすぎない様なものの、よくよくかんが
 へていつたならば決して放任しておくべきことで
 はなからうと存じます、教育の適度、家庭の教訓

の如何も公徳の有無もみなこれを見てみすぐにはさ
 とることができらるのでありますそして、此様な
 いたづらをする小兒は大凡學校に通ふてゐるもの
 が多いのでありますからして、自然と教師の忠實
 なるや無責任なるやもれしはかられますので御座
 います、公徳問題の盛なる今日かゝることをみさ
 し致しますことは、誠になげかはしいことであり
 ますが、然しこれはわたまごなしに現時の教育の
 方策が拙劣であるからということはをんとうのこ
 とではありません、私はむしろ家庭がそれまでに
 發達進歩してゐない、公徳心のある家庭がごくす
 くないからと思ふ、申すまでもなく一國の教育は
 各自家庭の教育の良否により、一國の公徳は各自
 家庭に於ける公徳心の有無によるものと思考致す
 ことで御座います、私は小兒のみがこんないたづ

らをすると思ふてゐましたのに、此の惡風が現今
 青年學生間にはやつてゐることを發見しました、
 こんなげんどうをみてもまだまだ我國の人々が一
 般に公徳心に乏しいのは明瞭なことでありませ
 小兒の樂書などの惡習をためなをそうとしたなら
 ば、先づ第一に家庭のうちに公徳心をこすいして
 ゆかねばならぬことです、尤も小兒の公徳心のす
 くないことは樂書にかぎつたことではないので、
 神社や公園などへゆつてむかんがへに木のえだを
 をつてみたり、そこらをわらして風致をそこなう
 などは矢張其一例でありませしう、それゆへなげ
 かはしいことには「木を折るべからず」とか「池
 の魚をとるべからず」とかと其他いろいろ注意
 がきをしたものがたつてをりますのを、みなさん
 はすでに御承知で御座いませしう、今や公徳問題

のかまびすしき今日其必要を感じながらも、其實
行にくるしむといふことはまへにも申して置きま
したとうり、御同様に残念なことではありませぬ
か、苦しも家庭で公徳心が眞にあつたならばか、
悪風も社會より消去することが出来ましよう、
公徳の念乏しき今の世大に之が養成に心を
ちいになつて、此様な悪弊をみならばせぬ様に小
兒のときからよいしつけをしてもらいたいのであ
ります。

(未完)

貞一の日記(抜粹)(明治三十六年五月)
承前(三十一日生男兒)

その母

明治卅八年一月廿三日。夕食前までは元氣よかり

しが、夕食後臥床に入れしに、聊か發熱の模様
あり。九時までは無事に眠る、九時過ぎて例の

通り葛湯を與へしに暫らくして嘔き、十分許り
過ぎて多量に粥などを吐き出す。其後は便通の
氣味あるか如く、うん／＼いひ續け腹痛あるか
の如くにも見らる、かくて熟睡せず、二度許り
小量の水質の便通あり。
午前七時起き午後七時眠る。食事四回。葛湯一
回。
今朝父上、學校の御用にて甲府へいらせらる。
廿四日 元氣よし、間食はウエーファース二枚
廿五日 夜に入りて熱あり、三十七度五分、咳出
づ。間食は、ウエーファース四枚、ミレンジ二
個。

二十六日 元氣なく下に臥すか母に抱かれたが
る。但し食事は變らず、熱度卅八度八分、間食
は前に同じ。六時半起き七時眠る、晝眠二時間。

二十七日 今日(こんにち)は元氣(げんき)よく歩き回(ま)はる。「か池(いけ)の蛙(かはづ)は」と歌(うた)へば「クワツクワツ」といふ事(こと)覺(おぼ)えた
り。

三十日 ウエーブワースを興(おた)へしより、悪(あ)しき
僻(くま)付(つ)きて、いつも取(と)り出(だ)す戸棚(とだな)の前(まへ)に歩(あ)りて行(い)つて、エー〜といつては、ねだる。

今日は神田(かんだ)の小原先生(おはらせんせい)の許(もと)に行く。

卅一日 咳(せき)も餘程(よほど)少(すく)なくなり、元氣(げんき)よく歩(あ)り回(ま)はる。下(した)の奥歯(おくば)一枚(まいまい)見(み)え初(はじ)む。

二月一日 小原先生(おはらせんせい)の指(さ)しに從(したが)ひ、オート、ミールを緒口(ちやく)に半盃(はんばい)ほどこしらえ、之(これ)に牛乳(ぎゅうにゅう)を茶勺(さじ)に一盃(まいまい)交(ま)せて興(おた)へしに喜(よろこ)びて飲(の)む。牛乳(ぎゅうにゅう)の這入(はい)つて居(ゐ)ることが分(わか)らぬと見(み)えたり。かくて、牛乳(ぎゅうにゅう)を飲(の)み慣(な)はせと仰(おほ)せられたるなり。食後(しょくご)障(しやう)なし。今日(こんにち)より食(しょく)事(じ)四回(よっかい)の中(なか)一回(いちかい)は、オートミールと

し、だんぐ牛乳(ぎゅうにゅう)の量(りやう)を増(ま)さんことを試(こ)むるこ
とにせり。

三日 「カーチャン」はどうしても言(い)はず、言(い)はせ様(やう)とすればたゞ「カー」とのみいふ。

四日 今日(こんにち)始めて、シー〜といつて小用(こよう)を教(おし)へ便器(べんき)を指(ゆび)さす、此後(このち)も大抵(たいてい)は教(おし)ふるようになれり。

夜の葛湯(くづゆ)を廢(はい)す。消化思(しょうかお)はしからぬ様(やう)なれば。

五日 今日(こんにち)より、前(まへ)の足利幼稚園(あしがひえんごう)に務(つと)められし安田(やすだ)さんに来て貰(もら)ふ事(こと)となりたり。

午前(ごぜん)父(ちち)に抱(いだ)かれて、本郷(ほんごう)の或(ある)先生(せんせい)の家(いへ)に行く、途(とちゆう)中(ちゆう)犬(いぬ)を見(み)る毎(ごと)に、アツワ〜といふ。ワ
ン〜の事(こと)なり。

六日 「トースン」とい(いは)せ様(やう)とすると、「デウ
ー」とい(い)ふ様(やう)にいふ。

七 日 昨日も今日も便通なし。リスリン座薬
を服用。

八 日 父學校より歸れば大抵洋服を和服に着
代へるを常とせるに、今日は其儘にして居らる
ゝを見て、すたゝと椅子の上に置ける父の和
服を引つ張り「エー」といつて父に迫る。
父は「ハイハイ」といつて着代へれば、足袋だの
帯だの、つぎぐに渡す。

午前の中、沓を履きて、安田さんと金毘羅神社
に遊び、午後一時間許り外に遊んで来る。
九 日 何時の間にか「いや」といふ事覚え
て氣に入らぬ事をいはれると、すぐ「いや」

「〜」といふ。
十一 日 午前中、安田さんに連れて貰つて、電
車にて日比谷公園に遊ぶ。電車の中にて、乗合

の兵隊さんに悪戯けて切符など借りて遊ぶ。午
後、父に抱かれて、上野公園に行き、凧車を見
る。「シユツ、シユツ、シユツ」などいひて、何時
までも見ようとする。「さあ、もう歸らう」とい
ふと、すぐ、いや〜と足をもがく。
十二 日 今日の日曜日にて天氣宜しければとて
父と辨當持ちにて、電車にて四谷まで行き、父
の友達石井さん所に行く、大きな猫あるを
見て「ニヤン〜」といひて戯れ遊ぶ。伯母さ
んに抱かれて、電車の玩具など買つて頂いて中
々御機嫌なり。歸途日比谷公園に遊ぶ。電車を
見る毎に乗らんとて騒ぐ。
(以下次號)



ありののまゝ

和歌子

○夏の一日を相州鶴沼のさる人の家に暮す。近く江の島を前に扣へ、横手をふりかへれば富士の高嶺を仰ぐべきうれしき地に、しかも無邪氣なる其家の孫女を友として濱風涼しき松林の中に遊び語り歌ふそのこゝちよさ。孫女呼んでヤーチャンと言ふ。四才なり。浪の音のゴ〜とときこゆるに紅塵万丈車馬の音のみ繁き都路をけさしも出で、來りしわれは、心も澄みてさく耳立て、「ヤーチャンアレハ何ノ音デセウ」と問へば、説明顔に「アノチアレハチー海ガヒトリデ言フノヨ」何ぞ其想の清く愛らしき。

○同じくヤーチャンの言ふ、「アタシ東京トクエヌマ(鶴沼)ト御家ドツサルアルノ、アナタ御家イク

ツ？」又「アタシ赤イノト黒塗ト下駄ガ三ツアルノ、アナタハ？」罪なき問にわれもいつしか子どもになりて笑ひ〜答へける夏の夕の涼しかりしよ。

○又或時ヤーチャン自家の庭園を案内してわれを導き池の邊に至りて、「コノ御池、アノ青蛙ガ飛ブノヨ」詩にも歌にも似たらんうつくしの詞、これは其單純無垢なるを喜びぬ。ヤーチャン今は可憐の幼稚園兒となり小さき口もて唱歌に話に、日々都の家居に父母の君を賑はせり。

○一夏を南海の一小村に過しつる或夕、午後の人水浴に一日の苦熱を洗ひて食後大小の同勢四五人と濱邊に散歩す。月は今しも後なる山の端を出で前は海原浪静かなり。山、月、海、人、舟、浪いづれか畫ならざる。いづれか詩ならざる。琵琶好

の名此一村にかくれなき紺屋の息子、月に面して得意の琵琶弾く、人七八其前に立ちて聴けり。おもしろき配合かなと數年を経たる今、遠き都に在りても、ありくと思ひ出さる。

○ことし二月、青山幼稚園を參觀す。場處柄として園兒中に出征軍人の子女多くあり。此兒の父君は

負傷されたり、かの兒のは病氣後送など聞くに、わはれ可憐の小さき人達父なき人となるなど同情

に堪へず。一兒「アノネ、ウチノ阿母サマハネ、ヨソノラバサンガイラツシャルトネ、今ニ又追送

品ヲ送リマスカラツテ抑ルノヨ」と聲調入りにて我袖にまつはり語る。軍國の幼兒、平時に知られぬ事も詞も覺ゆるかな。

○同じき園にて、一言一行いさぎよく、と廣瀬中佐の歌をうたふを聴く。近きはとりに其君の墓あ

り。其みたまは此無心なる幼兒の歌を日毎いかにきゝておはずぞ。旅順陥落見もはてぬ恨は深し海よりも、となほも張り上げて歌ふこそよく、わはれ其旅順落ちたりと、みたま生かせて告げまつりたや。

○開城以來軍人の青山墓地にとこしへに眠らるゝ方々數も知られぬばかりなるに、皆今呼び生かせて、以後の戦況知らせたと、墓地を行きながらつれなる人の語る。

○築地本願寺内に京橋區出征軍人幼兒保育所といふが有り。温かき人の情の露に浴せる撫し子、わが見たる時は二十餘名、いづれも其母は晝間其子を此所に預け置きては工場などに勞働に出で、日々の生計を立つるなり。其父は出で、満州の野に

戦へるなり。阿父サンハ？、と問へば、イクチャ

ニ行ツタノ、と答ふるあり、アツチ行ツタノと小
さき手もて指さすもあり。何も言はず只指し示す
もあり、あはれ指さるゝ其父なる人よ、幸に健
在なれ。生きて歸りて再び此子の頭を撫でよ。終
日を勞働してかひなくしくるすをされる妻に、勇
ましき戰語りして再び一家團樂の昔にかへれ。

○友の鵠沼に病を養へるを見まひてのかへるさ、
月影さやかに江の島は黒く静かに立てる瀕近き道
を駄菓子屋の老婆と二人して歩む。けさしも新橋
に傷病兵を見、瀟車中に戰争談を聞き、至る處
目に耳に、時局に關する印象を刻まれたるわれは、
ここにも亦此老いたる人の口より身にしむばか
りの實話を語りさかされぬ。

○ドーモ戦争は中々治マリマセンネ。早クスムト
ヨイゴザイマスガ。私ノ姉ノ處ノ二男も旅順デ戦

死イタシマシテネ。ソレハ〜オトナシノ者デユ
ク〜ハ、ソレ、サツキ御覽ニナリマシタ私ノ娘
アレヲメアハスツモリテ居リマシタノニ、ト
死ンデシマツタモノデスカラ姉モヒドクナゲ
キマシテネアナタ、アリモセヌ小遣錢ノ中カラア
マリ幾度モ寫眞ヲ寫シテハヨコシマスカラ、ソ
ナニ寫サナクテモト申シテヤリマシタガ、今ニナ
ツテ見ルト之ガシラセデゴザイマシタデセウ。

○問はず語りの老いたる婦人のなげき、さもある
べし。好箇小説の材料なり。否小説以上の眞事實
なり。敵國にも此國にも、之等もしくはは之以上の
悲劇は昨春來無數に演ぜられくりかへされつゝあ
るなり。わゝ軍國の裏面には慘なる事のひそめる
かな。

六花紛々

りうとう生

▲幼稚園の生徒と戦争

予は一日、日本橋區の北新堀邊にある、某幼稚園を參觀せり。今其參觀記は暫らく口にせざるも、之れが爲めに、予は多大の感想を起せる一事あれば、それを左に録せん。

恰も、二時間目の休課なりき。予は遊歩場に出で、生徒の運動せる様を見てありしに、南の一隅に三人の少女ありて、何やら頻りと熱心に話し合へるを見留めれば、其側に近寄り、何知らぬ顔して其話に耳を借せしに、西洋人が「私は日本語を習ひ初めました」とでも云へるごとき、いと覺束なの口調を以て、日露戦争の話なせる様なり。

予は、其内の一人なる、眼のクリ〜とした、顔のポツテリと肥へたる、筒袖を着せる少女に對ひ、

「少女は、なんて名なの。」

と尋ねしに、予の顔を見てニコリと笑ひ

「妾はね、おのぶちやん。」

と愛想よく答へたり。次に、其右手にある、顔の

少し面長な少女に對ひ、

「那麼では、少女は何て云ふの。」

と尋ねしに、恥しとや思ひけん、下を睨たま、名

乗らうともせず。この時、先の愛想よしの「おのぶちやん」が、

「這女は、お友ちゃん。」

と云つて「お友ちゃん」の肩をポンと一つ。予は

之れにて其「お友ちゃん」なることを知る。次に、

今一人なる少女に對ひ、

『少女のお姓名聞かして頂戴な。』

と問ひしに、這女も「お友ちゃん」の眞似其儘。

此に於て予は「お信ちゃん」に問ふの早道なるを悟り、

『お信ちゃん、この少女の名は、何て言ふの。』

と尋ねしに、彼の愛想好の「お信ちゃん」も、この度は無言の躰。更に彼の少女に對ひ、

『少女は、お松ちゃんと言つたけな。』

と開發的教授法を應用せしに、何等の功もなし。

さらばとて、この上強いて發問しなば、「かつ母さん」と泣き出されては大變と思ひ、其儘にして、

予は側の櫻木に寄りかゝり、那麼とはなく、三人の様子を伺ひ居りしに、又話は初まれり。

『あのねえ、妾の兄さんは兵士さんなのよ。今ね

戰に往て、よ。』

と椿の花の如き口より、透き通るやうな聲にて言

ひし其主は、爪核なる白色の、紅いバッチリとせ

し眼元に、愛嬌溢るゝ品の卑しからぬ面差、加ふ

るに、紫色のリボンを、蜻蛉の止まりし如く、其

ふさくとせし、お下げの髪の上に差ししは、殊

の外この少女の、可愛らしさを増したり。之れな

ん、予の姓名を聞きしとき、雜兵には名を聞かす

も汚がらしと名乗り給はらざりし彼の少女。

『あなたの兄さんは、露西亞の兵士に敗けやしな

くツて。』

と天真爛漫たる言語を放ちしは、彼のお友ちゃん、

之れを聞きたる無言の少女は、憤然とせしにや

『あら、妾の兄さんは強くてよ、いゝ事よ。』

と少し水蛙面たり、元より幼女のことなれば、其

機嫌直すことも得せず、一時は焼火に水濺きしが如し。

較暫らくせし頃、彼の愛想好の「お信ちやん」は「若しか、日本が露西亞の兵士に敗けたら、什麼なるでせう。」

と嘘然と問を發せしに、之れに氣を引かされて、不機嫌たりし無言の少女は、

『なに、露西亞なんかに敗けや爲なくつてよ。妾露西亞の兵士が來たら、刀で首斬つてやるは。』

と先きの不服は何所へやら逃げ失せて、恰も巴御前氣取り、この時、彼の「お友ちやん」は、語氣に力を含め、

『妾だつて斬つて遣りますよ、妾の宅の好い方の、鉄で斬つてやるは。』

この時、予は思はず失笑せり。さりながら、よく

其の言語を味はへは、「鉄で斬つてやるは」の中に、所謂日本魂の含蓄せるを見るなり。

お信ちやんも、我れ劣らじと思ひけん、活々とせし口調を以て、

『あのね、妾のお父さんがさう言つてましたは、若しか日本が敗けたら、お父さんと、先生も、兄

さんも、皆人が兵士さんになるんだつて。妾も其時には、兵士になつて敵の首、五ツも六ツも（この時聲を一層強め）取つて遣つてよ。ねえお友ちやん。』

と語り、全身皆是膽と云へる如き有様なりき。この時、四五名の男生隊を組み、一齊に。

「我國守る武士の、大和心を人間は、朝日に匂ふ山ざくら、咲くや霞の九重に」

足並揃ふと覺しく。

「左近の花に風吹かば、

四方におかしてん武士の

守れや守れはこ取りて

わだしむら雲討ち拂ひ」

聲勇ましく、三人の小女見かけて進入、わはや入り

り亂れんとせし其時。始業の鐘烈しく、

「ジャンジャン〜」

讀者諸君、この少女の談話を耳にして、果して如

何なる思をか起し給ひし、予は、この少女の言語

のみを以て、一朝事ある日に當りて 我國民全躰

悉く、頼みとするに足ると信する心を、一入強

くするを得たり。未だ東西の別をも知り得ざる、

無邪氣なる少女に於てすら斯のごとし、況して日

本男兒に於てをや。

彼の昨二月八日、旅順近海に於て、轟然爆然、

天柱折れ地軸崩るの勢を以て、日露の齟齬を開

きし以來、連戦連勝、皇軍の進む所敵なく、今は

全く制海權を我手に歸し、本年元旦早々、日堡壘

占領、望臺占領、敵將ステツセル將軍は、愈よ

開城の申告を、乃木大將迄提出致せるが如き、

未曾有の大快報に接し、吾々の未だ曾て知らざる

新年の御慶を、愛度申納むることを、共々に得る

に至りしも、皆之れ、彼の少女の談話中に包含せ

らるゝ、大和魂に因らずして、はた何にか求めん。

噫少女なる哉。噫大和魂なるかな。

▲小兒のお正月日記

この日記の主は、津村國太郎として、今春十三歳

なる高等小學二年生なり、諸學科中最も文章を得

意とし、一週一回宛、予の本に文章を持參するを

例とせり。左に掲ぐ所の日記は、お正月日記の

内に、元旦のみの一節を抜きしものにして、嘗て予が、其書き方の大体を語り、是非綴りかけよと命じたるものなれど、一言一句も添削せず其まゝを記せり。

一月一日

津村國太郎

今日は元正月でありますから、何時もよりか早く起きやうと思つて、まだ雀や鳥の鳴かない先に起きました。ちやうずを濟ますと、すぐ父母に祝辭を述べまして、おぞうにを食べました。二せん目を食べかけると、號外々と云ふ聲がしますゆへ、一枚買ひますと、お父さんが、讀んで聞かせて、松樹山を占領したつて聞きました。

すると、下女のふつねが、しよーゆ山をせん

じよーしましたか、と云つて、皆を大そー笑はせました。おばーさんが、笑ふかどには福來り、目出たいくつて申されました。

私はおぞーにを、七ツ食べましたら、お父さんが、お前は年が一つ大きくなつたから、昨年よりは、二つもたく山食べるよーに成つたつて申されました。

それから、學校に式に行きまして、十一時半に歸りごはんを食べました。それから姉さんと、手風琴や文章をおそはる、太田先生の所へゆきました。ところが先生は留守であります。姉さんは、いつも先生はお留守だねと、云ひながら歸りました。

歸りますと、淺草のお清さんと秀雄さんが、遊びに来てゐました。私の家で二時間ほど遊ん

で、お母さまと姉さんと私と、お清さんと秀雄さんとで、淺草の秀雄さん所へ行きました。電車で行きました。私は手風琴を以て、姉さんは月琴を以て、おつかさんは百人しゆうをもちました。

それから、月琴や手風琴を鳴しますと、お清さんが大それた上手になつたつて、ほめました。私はうれしくあります。姉さんは二人で日曜にはおけいこに行きますから、こんどはもつと上手になりますつて、云ひますと、おつかさんが、そんなじまんしてはいけなないと云はれました。それから、おつかさんをよばれて電車で歸りました。

歸ると、姉さんと二人で、日記を作らねば、申わけかないで、書きました。すますと、姉さん

んのお友だちか来て、かるたをはじめました。私は日記のすむまでしなかつたのです、ねたのは十二時すぎでした。

▲少女の文學

この頃の發句の流行は非常なものなり。新聞雜誌と名の附くものに、殆んど發句のなきものなし。新聞雜誌にして、發句の缺けたるものは、何となくもの足らぬ心せらる。發句の隆盛亦極まれりと云ふべし。

予の知る女學生に、發句を熱心に學べる人あり。頃日數十句を示し、予に添削してよと乞はる。見るに、中には捨て難き句、なきにしもあらず。依つて左に記すこと、せり。元より、少女の習ひ初めなれば、讀者に示すほどの名句出來得べき筈なし。只年齢の割合にはと思ひて、掲げしものに

過ぎなれば、讀者、其心してよ。

△夏秋雜吟

松岡とし子(十五才)

山寺の萩花咲きてキリくす
虫の音や古郷しのぶかりの宿
今朝とりし虫は眠りて夜半の月
山路に蛇の横たふ暑さかな
夕立や横空にげて秋あつし
かやの中稻妻光る人のかは

△裕

津村伊勢子(十六才)

日暮には綿入はしや初裕
初裕身に添ふ風やなれ心
昨日今日裕着出す花見かな
今日の花見にと姉より此裕

△時 鳥

全 人

あの枝に月をかけはや時鳥
はととさす鳴きつる方に一夜かな
はととさす一聲きかせ明けぬ間に
鷺の眼にふんな落しぞ時鳥

△田 植

恐田千代子(十四才)

これのみは男もゆづる田植哉
乙女子に鶯交る田植かな

△日 傘

全 人

旅女日傘かついで路いばり
子守子や日傘たゝみて地藏堂

△田 植

佐藤たけの(十六才)

下手なほど丁寧さうな田植哉
なく子をば路に境へて田植哉

△日傘

全人

藤園や身動き出来ぬ日傘かな

△更衣

全人

初日には横にもならず衣更
衣更心も共にわたらしく

△短夜

大澤千鶴(十七歳)

短夜や朝けいこうに小言かな

短夜や皿に飯もる給仕人

短夜や直立さるゝ生徒かな

短夜や語り盡さず別れけり

(予は、少女らしくも無き、古句めきたるもの多きを遺憾となす)

雪つぶて

つねを

一、いつか積りし大雪の

庭に戦かふ稚兒等の

よせくる敵はおはくとも

あかさ心のひと筋に

雪のつぶてに骨くたき

氷の刃戟に肉やぶる

二、くろき煙をわけ入りて

向へる敵はさきはらひ

手足は雪にこはるとも

いくさの場にさし立つる

白旗みゆる其れまでは

劔をさめず砲おこな

三、天地はよしや暗くとも

黄金の鵒の光あり

大和男児の生血にて

み雪の色は染めざれと

勇みに勇むつはものゝ

いさほひいとよ凄まじや

四、人と生れし甲斐ありて

君のみ前にひかりある

玉と散るとも瓦なし

残りはせじな國のため

進めやすめ諸共に

一步もわとへは退くな

五、命はかるし義はあもし

さみの御爲めに雄々しくも

勳功を建つるはこの時ぞ

砲の轟きに関のこゑ

聴がて金鵒の勳章に

錦衣かざらん父母の前

俳句披露 (集句二百十章)

題に限つたせい比較的よい句の集らなかつたの甚だ残念でした御約束の通り天地人の三名に賞を送りました

葉櫻になりて歸るや新夫婦	横濱	まつ	枝子
新築の家や乙鳥も日になるゝ	全	ひ	さ子
投げ込んだ文や櫻の花だより	全	ち	よ子
はるぐと來た振りもなし初燕	全	全	
武威高しいくさに稀れな組元節	埼玉	松	年
酔いさめて寒し日暮の山櫻	千葉	は	な子
見覺えのあるや乙鳥の飛ぶ姿	全	全	
金はかる音には馴れて乙鳥	東京	久	米辰子
咲き満ちて乳や願さん姥櫻	全		

天	地	人
都より歌咏みに來る櫻哉	行列の槍先を飛ぶ乙鳥哉	ビヤノ鳴る異人の家や紀元節
十年の恨の櫻開きけり	勅使立つ敵傍の山や紀元節	
	戦勝の紀念の櫻開きけり	
	乙鳥の巢や自慢の主人かな	
	雪の積むきこりの家や紀元節	
	片枝わ水に添いたる櫻哉	
	捧げたる神酒配るや紀元節	
	夜櫻の楊屋に還入る八文字	
	燕や今日も覗きに詩趣のまど	
	紀元節都下百萬の旭旗哉	
	振り袖の重ふ見えけり散る櫻	
	老木に朽ちぬ情けや咲櫻	
	羽づかいわ雨にも軽し飛ぶ燕	
	人聲に明け暮れつづく櫻哉	
	乙鳥から家の和合や新世帯	
	暮れ兼ねて居るや櫻の隅田川	
	眞先に駆けぬけにけり散る櫻	
	手植せし子に捧ぐるや初櫻	
	豊前	雪花
仙臺	一三	女子
東京	全	女子
鹿兒島	春	子
長野	たか	子
	飯塚	直志
岡山	全	
東京	藤並	ゆかり子
	全	
	全	
	なる	子
兵庫	全	
福岡	青	字
木曾	つな	枝子
神奈川	姜	子
羽前	風	月
岡山	山本	厚平
	全	
京都	清	水
埼玉	松	平
東京	久米	辰子

追加 樂天堂 平岩學洋

水色も暮れ兼ねて居る櫻哉
鳥指と背中合せや飛ぶ乙鳥
紀元節祝いに軍畫送りけり
(撰評にへきて謝す)
よりぐの花摘みにけり春の野へ

家庭とは何ぞや

家庭といふ語は近頃になつて、著るしく人の注意する所となりました。で、こゝに

家庭とは何ぞや

といふ問を設けて、家庭といふ語の意味を、簡明に表出することは、雷に趣味ある許りでなく、所謂家庭生活を營んで行く上にも頗る必要なこと

かんが考へますから、こゝに廣く、其答を募ります。

左記の條件、御承知の上で、續々御贈附を願ひます。

一、用紙は端書、文句は成るべく簡短が宜しい。

一、氏名は匿名でも宜しい。

一、期日は本月二十日まで。

一、読者に限らず、何人でも答へられます。

一、答の優等と認められた方三名までは、本會から、粗品を呈上します。

一、答案は下の所にて。

東京下谷區竹町一東 基吉

尙答考のため外國の書に見えた二三を擧げて見ましよう。

Home : A world of strife shut out, a world of love shut in.

争鬭のしめ出されたる世界、愛のしめ入れられたる世界。

Home : The father's kingdom, the mother's world, and the children's paradise.

父の王国、母の世界、而して子等の樂園。

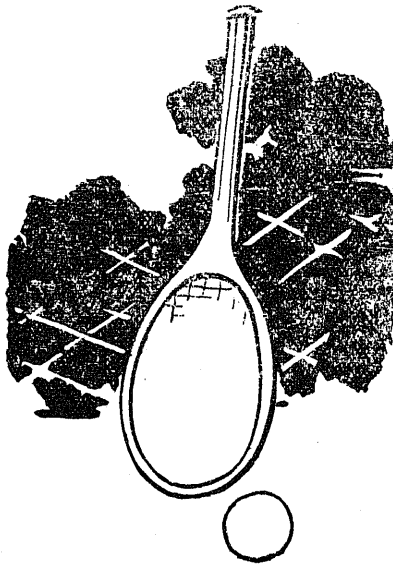
Home : The place where the small are great, and the great

are small.

小さいものは大にして、大なるものゝ小なる所。

追伸

本月發行の誌上に答案を披露いたすべく豫期して居りましたが、何分にも尙思ふ程の答案がよりません。遺憾ながら、尙繰り延ばせて、募集します。



讀書の葉

教育我子の惡徳

大村仁太郎氏編述、東京市神田區表神保町二番
地同文館發行、定價金六十錢

此書は、惡徳養成法一名蟹の横這ひといふ標題で
今を距る百二十餘年前始めて世に公にせられた獨
このザルツマン氏の著書を基礎として編述せられ
たものである。第一章世の父母に警告す、第二章
惡徳惡習の養成法、となつて居つて、乾燥に理屈
ばつて俚耳に入らぬ様にできて居る教育學書とは
頗る其趣を異にして居る、まづ初に兒童の不幸に
陥る原因は其責父母に在る事を懇切に警告して其
覺醒を促し、次に兒童をこういふ人にしようと思

へばこういふ風に悪く教育すればよいとか、あゝ
いふ家庭に人となればかやういふ惡い人になる
とかいふ風に、凡て反面的に惡い側の教育事例が
最も通俗的小説的に記されて居るので、たとへば
亂雜なる人物を養成するには秩序の觀念を撲滅せ
よとか、殘酷なる人物養成には動物を虐待して其
苦痛の状態を目撃せしめよといふ類の題目であ
る。で此書を手にする人は必ず面白くて知らず
く讀んで行く間に思はずも、我家庭は如何、我
身の言行は果して我子の模範になつて居るか、自
分は子供を正しく教育して居るかといふ様な反省
に心を正す事もあらうし、いつの間にか高尚深遠
な教育の理法を訓へられて何かと悟る事もあらう
し、要するに氣のつかぬ原因が恐るべき結果を來
す事を知つて我家我身の改良に志す筈である。お

そらく此書に由りて教育的に莫大の利益を得ぬ人は一人もあるまい。記者は此書があらゆる家庭に父母の讀み物として備へられ再讀三讀して我子を悪徳に導かぬ豫防をせられん事を切望する。

女子實踐教育學

本書は多年女子高等師範學校に於て教授の任に當れる、黒田、東兩教授の合著で、専ら高等女學校生徒、師範女生徒の教科書とせん爲めだといふこと。夫で著述の体裁は凡べて、女子といふ立場から見て説かれて居る。従つて家庭教育から幼稚園保育は詳細に説き且つ心意状態の欄に於ては、専ら兒童心意發達の状況を説き詳して其教養の方法に及んで居る。文章も流暢で平易で教科書には適當であらう。其上おつ母さん方も一讀すれば、必

らず教育の何たるかを知るに都合がよからうと思ふ。定價は六十錢、發行所は京橋區南傳馬町二ノ五目黒書店。

家政百ヶ條

これは、大日本女學會より發行する「をんな」の臨時増刊である。發行の趣意は家政に關する法則を一般婦人に辨へしめ戰國の際家内に無駄を生ぜしめず、能く家政を整理せしむるに在りといふことで、載する所百ヶ條三百六十七項、料理より裁縫洗濯、衛生、教育、禮法、家庭の心得べき法令まで、家庭に關することは一切網羅して、然も、極殊に、家事衛生などに付きては、随分細かい所まで書かれて居るから、眞に家庭の寶典といつてよ

い、夫で定價は僅に十二錢、これも一般に本書と普及させたいとの目的から来て居るといふこと、

(發行所は麴町區下二番町大日本女學會)

編 圖書教育會 纂 圖書教科書 高等女學校用

此頃、編者の一人から本書一部を贈られたから、聊か本誌を藉りて、女學校の受持の先生方へ御紹介し併せて、一つ二つ、自分の意見をも述べて見ることにした。

本書は、大體、一學年三學期に各一冊づゝ、他に夏期自習用を各學年一冊づゝ合せて四冊づゝを配當して居る。大體からいつて、従前の圖書教科書と著るしく其選を是にする所は、緒言にもある通り、書中に多く寫眞版を挿入して、以て手本から實物寫生に至る楷梯を一步近くした事である。次

に特に注意すべきは、現今の専門的に流れたる中等學校の圖書教授に鑑み、且つ如何なる材料でも書き得る力を得させんが爲めに、毛筆書も、鉛筆書もペン書も一切併せ用ゐて居ることである。此二點は實に、本書の特色であるが其他、印刷から、彩色から、材料の選擇配合等より教授上微細の點に於ても何れも多大の注意を拂はれた所は、確かに、本書が従前の教科書中に於て、頭角を顯したものと見るべく、又殆んど研究せられなかつた中等教育の圖書教授の方面に向つて確に一新面を開いたものである。そこで、さて本書を採用しようとして第一に起つて來る問題は定價のことである。實際に於て、本書の印刷より其他から見ると高いのではないが従前のに比すると少し不廉だ。最も低い所で一冊二十錢から、上は四十錢まで

ある。而しよく考へて見ると従前には少し易過ぎたかも知れぬ。一學期に之れ丈は仕方あるまい。次には、種々の材料を備へねばならぬ。即ちペンも、鉛筆畫の道具も、水彩畫の道具も、皆一通りは費るといふことである。これはどの位まで備へねばならぬのか僕にはよくは分らぬからいはぬこととして、一番心配なのは、果して十分之を使ひこなす教員があるかどうかといふことである。若し、従來の教員だとすると、夫が中々覺束ない。そうなるに編者の折角の苦心も水泡に歸せねばならぬ。一体、普通教育の學校では、鉛筆畫とか毛筆畫とかの一方に偏するはよくない、何でもかける様に教育するのによいといふのは本書の趣意で、夫には小生もどこまでも同意だ、然し、高等女學校現在の教員で、甘く本書の趣意に由つて何

れも併せて授け得る教員があるかどうか、詳しく言ふと、鉛筆畫も毛筆畫もペン畫もやれる教員があるかどうかといふことであるが、而し苟しくも普通教育の畫の教師としては、先づ普通の畫なら畫けるものと考へて宜しからう、其他にも本書の十分の活用に付きては、生中な教員ではどうかと思はれる節もあるが、其點に付きては何れ、教師用も出來たといふ事だから心配は要るまい、も一つは、かういふ非難も起るかも知れぬ、實際、女學校の様な僅少な時間、處で、そういろ／＼の畫の種類をやつては、丸で蚊蜂取らず、どれにも上達させることが出來まい、これが中で尤もの非難と思ふが此點に付きて圖畫教育會の意見は如何であらうか、尙内容につきて、多少氣付いた所もあるが、長くなるから、夫は次回にでも回さう。

と
 兎に角本書は近來の好著述で其立派の体裁からい
 つて、各自の家庭に備へて、娛樂にしても宜しい
 と思ふ。

日本の家庭

「日本の家庭」と題する日刊雑誌、来る十日、書肆同文館より發
 刊せらるべしと。我が國固有の善良優美なる家風を基礎として、
 時勢の進歩に適應する所の健全なる家庭を理想とし、實際的にし
 て且つ趣味あるものたらしめんとする主義なりと云ふ。殊に目下
 の重要問題たる家庭教育に至りては、發行所獨特の長所として、
 大に力を盡すといへば、定めて有益なるものを現出すべく、一般
 家庭の好讀みものたるべし。定價は一部八錢なりと。詳しくは出
 た上で、御紹介致すべし。



在暹羅河野嬢よりの書面

五十六

客年十月、暹羅國河原清子嬢より黒田教授に宛てたる書狀に由るに全嬢近來の消息は次の如し。

(前略) さて、私も俄に遠方に参りまして、まるで井戸の蛙が飛び出したと一向變らないので、随分困りますけれども、旅行上から出来た種々の經驗を得ました事々は、感謝致さねばなりません。夢にも見ようとは思はなかつた土地を見る事も出来、知り人もふえて参りましたから、まづ身に取つては幸福が一つありましたのでありませうか、とは申せ、月あかり夜には舊校の松か枝にかゝりし月を思ひ、暗夜道を照らす電光を見ては、お茶の水橋前の白光を思ひ出し、日として昔を憶ばぬ事はございませぬ。此境界に始終心身をなやまして居

る私は、やはり幸福でございませうか、噫
 當地は全くの平野でございまして、東京よりもま
 だ甚しい、坂一つ見る事さへ出来ませぬ。従つて
 よき景色もございませぬ。しかし、幾分かメナム
 河が景色を添へて居る丈でございしますが、これも
 濁つた水を見ては、其景色の十分の九は減じられ
 ます。朝から夕方までは炎暑と闘ひましても、こ
 れを慰むる場所がございませぬ。たゞ一週に一回
 位、人家少き所へドライブに出掛くる位が、最上
 の樂でございませぬのは、人としては随分不愉快な
 暮し方ではございませぬか、遊ぶべき博物館、
 圖書館などもあると申す事でありますが、しかし
 まだ折がなくて参られませぬ。参つた所で、盲目
 の私には、其外面位は見て参られませうが、之で
 自分の知識を高むるとか、修養を致す事は出来な

いと思ひますから、寧ろ家に居て讀書致す事が、
 一番の得策でせうと考へまして、なるべく之を力
 めたいと思ひますが、根氣のつかないには、自
 分ながらわきれてしまひます。考へ事なども、當
 地では決して出来ないと、私共は口を揃へて申し
 ますが、どうしても時候の具合が、大變に影響し
 た居る事でございませう。此節はよほど凌ぎ易く
 なりましたから、夜半などは随分勉強は出来る筈
 でございませぬけれど、やはりつかれがたまひ、
 眠氣を催しますから、寝て仕舞ふといふ風になり
 ます。東京では七時間やすめば身體の勞れが恢復
 しますが、當地では八時間以上休まねば、次の日
 はねむくてたまりませぬ。そこで、毎日一時間以
 上の損をして居ます。此の償を致す折は、私には
 どうしても見付かりませぬ。そこで、毎日自分の

心掛け丈(ただ)けで、極僅(きくわり)ではあります(が)、今日(こんにち)は先づ
 之(これ)丈(ただ)け得(え)たといふ愉快(ゆいわい)をいつてやすみます。これ
 が重(かさ)なればちりも積(つ)れば山(やま)となると全様(ぜんやう)でござい
 ませうと、實(じつ)にかすかな光明(くわうめう)で、毎日(まいにち)を暮(くら)して居
 ます。時々(ときどき)は先生(せんせい)のお戒(かい)めを承(うけたま)はり、御教(おんを)を受(う)け
 る事(こと)が出来(でき)れば、どんなにうれいしでございませ
 う。

學校(がっこう)は、只今(ただいま)では大變(たいへん)に面白(おもしろ)くなつた様(やう)でござい
 ます。生徒數(せいとすう)は本日(ほんじつ)にて、五十七人(ごじゅうしちにん)詐(は)りとなり、
 開校(かいがう)日(ひ)僅(わり)かにして、生徒數(せいとすう)の割(わり)合(あひ)に多い(おほ)いといふ點(てん)
 は、誰(たれ)も驚(おどろ)いて居(ゐ)る位(くらい)であります。當(たう)地(ち)で、
 十四年(じゅうしにんねん)間(かん)開(ひら)いて居(ゐ)る米(べい)國(こく)人(じん)の學(がく)校(こう)生(せい)徒(と)は、八十人(はっしにん)
 ございますとの事(こと)で、大(たい)概(がい)は六十人(にじゅうにん)位(くらい)でございま
 すから、こんな感(かん)じが起(お)るのでございませうが、
 日本(にほん)の事(こと)を思(おも)ひますと、可(か)笑(か)しく感(かん)じます。

皇后(くわうごう)陛(れい)下(げ)も、非(ひ)常(じょう)に當(たう)校(こう)の事(こと)につきて御喜(およろこ)びの御
 樣(やう)子(す)にて、しばしありがたき御口傳(ごこうでん)をいたゞき
 ました。先達(せんたつ)も「學(がく)校(こう)舎(しゃ)がよくないから、よい處
 を心配(しんぱい)する、よい處(ところ)に參(まゐ)れば、教(け)師(し)も幸(かう)福(ふ)であら
 ふから」といふ思(おぼ)し召(め)しで、よい處(ところ)を御(お)さ(が)し下(くだ)
 さいまして、十二日(じふににち)には轉校致(てんがうた)す様(やう)、はゞ定(ま)まり
 ました。國(くに)は違(ちが)つても、生(せい)徒(と)はやつぱり生(せい)徒(と)で
 ございましてどこまでも、可(か)愛(あい)うございます、最(さい)初(しよ)
 は言葉(ことば)も通(つう)じませぬし、國(くに)の變(かわ)つてゐる處(ところ)から、
 御互(おたがひ)の情(じやう)を知(し)ることも六(む)ヶ(が)しくございしましたが、
 此節(このせう)では餘程(よほど)よくなれて參(まゐ)りまして、校(がう)内(ない)は愛(あい)を
 以(もつ)て充(み)たされて居(ゐ)る様(やう)に感(かん)じます。先(せん)日(じつ)も私(わたし)は子
 供(こども)と遊(あそ)んで居(ゐ)ました。不(よ)圖(と)いつもの想(まう)像(じやう)に心(こころ)をう
 つされまして、「御代(みよ)のめぐみとふみまよう」と初(しよ)
 句(く)にあるうたをうたひましたら、生(せい)徒(と)は耳(みみ)をすま

せて、きいて居ましたが、やがて、「先生夫は何の歌でございますか」と申しますので、「これは先生にお別れいたす時の歌です」と答へますと、「毎日少しづゝ覺えますれば、きつと出来ませうから、どうぞ教へて頂戴、それから、先生御歸國遊ばす時には、うたひます、どうぞ、其意味を翻譯して下さいまし」との事で、私は閉口致しましたけれども、先二小節丈は難なく歌ひうる様になりました。

先日、東京に留學して居る暹羅の小供の刺繡や造花や圖書が參りましたので、陛下から早速當校へおもたせ下さいました。陛下も非常にお喜でございましてと申す事でございしました。貴族社會では陛下が教育に御力を注がせ玉ふ事が、一大話にありましてゐますとの事でございします。まづ當國

の爲め大賀いたすべき事と思ひます。(下略)

十月十六日夜

九州地方の狀況

久保やま子

唯今迄は餘りくだらぬと存、差扣へて居りましたが、都の御方に邊陲僻地の生活の有様を申しますのも、或は御參考の一助かとも存ますから、申上ます、都と邊陲の様を比へますと、都の中以下の生活の様は田舎の上の品より上等です。御笑ひ草迄に食物の事から申上ましよう、四國西南岸の地(東南は調)是れに對する九州海岸、即ち豊後、延て日、隅、薩の一帯海濱の地は、先づ甘薯が唯一の食物です、山間に入りますと粟、玉蜀黍を用ゐます(麥は申す)調理の致し方は種々ですが、蒸し

て其儘用ゐるもあり、又日向地では皮をひき細片となし、極めて少量の米を混じり炊く、飯櫃にとるとき、杓子にて練り用ゆ、一見甘薯とも見えぬ様にして居ります。(通俗ネリク) 先づ一日一人の食米は壹合内外でしよう、下の下の品になると、甘薯耳を食して居るもあり、又春の末夏始めに用ゆべく貯へるには冬の始め切干となし、或は其切干を水車にかけ粉米として貯へます、其切干のお飯などは何と名をつけてよいか、到底都會のお方々の想像だも及ばん處で御座います、斯の如き次第ですから、他府縣の農家の様に繻菜を澤山に調理致しません、極めて下等民になるとネリクリに食鹽を付着して、掌を食器に代用するのです、先づ舊八月十五夜から麥の成熟致す迄の食物です、麥が出来ますと三月計りの間は麥を用ゐます

抱腹に堪へぬ談があります、私の末子満三歳になり、或時掌を差出し是非御飯を頂戴と申すから、叱りましたらお母ちゃん、御馳走まんまは掌でたべてはわるいかと問ひました(阿々笑米飯を小兒など) 此甘薯の常食は年々歳々發達して御馳走まいと云ふ) 此甘薯の常食は年々歳々發達して民家に近き丘陵は開墾されて畑となりつゝ見えません。

夫れから衣服は如何と申と、勿論綿衣ですが是れも御讀になりましたら皆様の御想像外だるふと存ます、日向地は殊更甚しう御座ます(尤も薩摩は) 皇祖基業の土地柄故にや、男女とも容貌は割合に宜敷、言語も善く判ります、暖地なれば男女とも筒袖或は廣袖の半纏を用ゐ、半身を露出したるが常です、女子は大抵三巾の前垂れを用ゐる跣足が十中の八九です、長着(通常衣服)を用ゐてもしむきを用ゐ

帯を用ゐぬが普通です、(此頃はまゝ)かゝる有様故
 男女とも祝儀無祝儀の節用ゆへに紋付夏冬の二着
 と帯一つあれば、充分の衣裳持ちなので、

かゝる單純な生活で今日の暮し方に骨が折れませ
 んから、一般に遊惰者が澤山出來ます、男女とも
 十四五歳になると、先づ自宅に靜肅に、終夜安眠
 する者は寡ひのです、奉公人でも同様です。尤も
 暖地の事なれば冬日と申ても、四巾蒲團一枚あれ
 ば充分としてあります、極下層になると一家に蒲
 團一枚と申様なのもあるのです、着のみの儘爐邊
 にでる寢を致すが先づ若者の常位なのです、斯の
 如き有様ですから節操とか道徳とか申事は御談に
 なりません。其邊は宜しく御了察を願ふのです。
 然し惡むべき程の事は更らない、何にも知らんで
 すから致し方が有りませんから避地に生れ逢ふた

者こそ不憫な者で、學校と申しても形式だけ、先づ
 尋常科は何れの教壇にも赤兒が四五名位は居る有
 様(家事の都合により子)教師か折角講義をしても、生
 徒は嘯て勝手な事をして居ると申有様、尤も日
 向全体が皆と申すでも有りませひが、先づ全國
 で教育程度は宮崎縣が劣りて居る事は定論だそふ
 です、其中で又私の原籍地が劣等なのです、まだ
 此邊になりますと封建時代の風が在りまし
 て、教員とか役員とか申と、肩で風を切り、随分
 抱腹に堪ぬ事があります、たまゝ有爲の人が出
 ると直に押し除けると申す惡弊風が有るに困りま
 す、私が或日卒業式に招かれて參りましたが、其
 時の校長は新任者で先づ相當人物でした、恰度昨
 年の事で、日露戰爭の事に就き種々談して居りま
 したが、謹聽して居るのは卒業生のみ、他の生徒

は嘯くもあれはつかみあふて居るのもある、然るに男女多くの職員は顔を揃へて居る計りで、少しも制さない對岸の火事もたゞならぬのです、局外者なる私何んとか注意を致そふかと思ふ位でありました、演説がすむ、來賓が起つ、生徒らは蜘蛛の子を散らす様に勝手に走り出すと申有様、悪口の様ですが、眞實の談、何とか此弊風を治療致す良薬もがなと、志ある者はより々相談も致し、青年會とか有志會とか申す組織は致して有ります、中々むづかしいものです、かゝる所に生長致す兒童の不憫さは格別なものです、上知と下愚は移らずと孔子も申されましたが、普通の者は是非郷里の悪習に染ります、私はつくゞ社會教育と申事の必要を悟りました。

(以下次號)

佛國婦人の夜業

佛國に於ては、近來婦人の夜業盛に行はれて將來恐るべき結果を生ぜんとする虞あり、此等の婦人は睡眠時間不足なるより、小兒の養育法不完全に陥り易し、同國にては十餘年前に、法律を以て婦人の夜間労働を禁じたるが、工業の種類に依りては例外を設けたり、然るに今は此例外頗る廣き範圍に行はるゝに至りたるなり、晝間はクレシユ(小兒代育所)あるも、夜間は之を閉ざしあるを以て、婦人の労働中小兒は實に無慘なる状態に在るものとす、目下此労働を禁止せんがため、盛んなる運動ある由なり。

(六合雜誌)

會食中の談話

英國の十九世紀雜誌に於て、フレデリツキ、ハリ

ン夫人は、佛國人の食卓に於ける風習を論じて曰く、佛國に於ては、人々集まりて會食するるとき、吾等に異なりたる風習あり、例へ其人數は八九人の小會にては、談話は必ず全躰の人に對して爲すを常とし、隣席の人と對談を爲すが如きは、無作法なることなりと認めらる、故に一般に對する談話は食鹽の如く、麵包の如く、葡萄酒の如く、共通のものにして、其談話は頓智と善意とに富み、極めて爽快に且つ興味を有し、聞くものをして覺えず心身を興奮せしむ、又佛人は巧みに談話することを好み、自國語を以て社交上最も美なる且つ最も便なるものとなすが如し、蓋し之れ正當の見解にして、佛人は之が爲に發音に注意し、言語を選択し、熟練なる且つ纖麗なる談話に努むるなり、之れ吾等の大に學ぶべき所なりと。(同上)

婦人と齒

婦人は比較的男子よりも齒を破壊し若しくは齒を病むもの多く殊に妊娠の後は齒牙に送る營養分がへりますから齒痛を患るものが多いので子兒に乳を吞ませる時季も又同じ又外國に比するに日本の小兒の齒を患るもの多し主として其の母親の不注意に基くもので要するに齒の掃除の行届かざるに因るものにて彼のミンツバの如き成長の後有害の原因となるものもあまり注意を引くとなきは誠に嘆息の至りなり。

(婦人衛生雜誌)



保育者のため

幼稚園の遊戯 (其五)

松村 ひさ

これは本誌第四卷第四號所載幼稚園の遊戯の續き
 之は本誌第四卷第四號所載幼稚園の遊戯の續き
 でございます、原書「幼稚園の理論及實際」に
 は前掲の通り大体に付ての注意の上に更に「猶
 遊戯に付て」と題されて居る部分の抜萃でござ
 います。

人を教へるのに消極的にするよりは積極的にする
 方がよいといふのは眞理である。それ故に二つの
 道の一ツが當然人を危険な方に導くといふ事を知
 つて居る人は、其辻に立つて居つて後から來る人
 に對して指示者となり案内者となり、親切に其安

全な道を教へねばならぬ、併し此場合に單に正し
 い方ばかりを指し示すだけでは不十分なので、行
 つて良くない方の事をも話して、不注意の結果其
 方の道に入り込まぬやうに教へる事も亦誠に必要
 である。それで自分(著者)は、保姆がこういう事
 を遊戯(協同遊戯)を言ふ以下之に做すの時にして
 はならぬといふ事を少し述べて見たいと思ふ。

先づ最初に、保姆は大砲から飛び出して彈丸の様
 に、其處に集まつて居る幼兒の仲間に向つて熱火
 を與へる様な事をしてはならぬ、あまり突然な問
 を出したたり、あまり突飛な事を思ひがけさせた
 りなどして、子供の方ではあわて、しまつて、ど
 うする事もできぬといふ様な場合を作るのはよろ
 しくない。

なるほど之は注意すべき事でございませう。幼

兒の方では考の上は何の用意もなく平靜に氣
 樂に構へて居るところへ、先生獨りが合點をし
 て突然な事を言つたり、したり、させたりいた
 しましたらばどうでございませう。尤も幼兒は
 變化を愛し奇を好みます。協同遊戯がいかによ
 しいものであつてもあまり同じ種類のものをつ
 いけ様に永くさせられたり、おもしろくもない
 事を陰氣にさせられたりなどいたしますと閉口
 するのは自然でございませう。けれども此點をわ
 まり考へ過ぎ又は誤り考へて、いつも／＼新ら
 しい突飛な事で幼兒の注意を惹かう、興味を起
 させようとするのはよくない事で、まして幼兒
 が驚きあわてるまでの刺戟を興へるといふ事
 は、幼兒の心身の爲に害があるばかりでなく、
 遂にはよく／＼珍らしい事でなければ注意をせ

ぬ、通例の事では面白からぬといふ習慣がつき
 ます、そうしてこうなると先生は常に遊戯の新
 工夫に汲汲とすることになります。一の遊戯の
 仕方を一生懸命に何年間も固守して少しも改良
 しようと思せず永い間最初一度定めた通にする
 といふのが極端ならば、毎日新奇々々と突飛な方
 にはばかり考を向けて苦むのも極端かと考へて
 居ります。
 保母は或遊戯の時間を單に其時間の爲特別に其事
 をして居るのに過ぎぬと考へてはならぬ。恩物、
 談話、其他の事柄に關連して効を奏するものであ
 る事を忘れてはならぬ。
 保母はあまり主格なり種類なりのちがふものをば
 ゴタ／＼と順序なく並べ立て組み合せてはならぬ
 もしこういう風になると十分な訓練をする事がで

いぬ。

之もよくある事ではございませうか。あれもよいこれもよいと何でもかでも組み合せて種類や順序を深く考へぬとか、又はまわ此邊にして置かう位で好加減に組み合すとかいふ風でございしましたならば、折角一ツ々の各は貴い面白い遊戯といたしましても、幼児に實行される時には只ゴロ／＼とつゞくばかりであまり利益がないかも知れませぬ。ホンの幼児にさせる遊戯と軽く考へおろそかに組み合せてさせるのと、幼児に適した有益なしかも幼児の喜ぶものを順序よく種類別もよく、組み合せてさせるのとは、其効果に大きな差異があらうと存じます。

保母は或遊戯から他の遊戯に移る時に、あまりそれからそれへと何の連絡もなくズン／＼變化させ

てはならぬ。之は恒心なき人を作る根本になる。保母はあまり何時も同じ仕方での遊戯をさせてはならぬ。少し變化させると丸で新しいもの、様に幼児は思ふものである。

大阪の保育界

大阪市保育會は、是迄年二回會員の集會を催し、斯道の研究をなしつゝ、おりしか、集會には動もすれば議論に流れて婦人會員等は手持無沙汰のことも多ければ、此程常議員四十名、男三十名、女十名を選びて代議機關となし、一月二十七日其第一回を開き左の諸件を議したり。

- 一 常議員會規則を造ると
- 一 出征者の幼児を他の幼児より先じて入園せしめ、又保育料を免除する様各園長へ交渉する

と(但し保育料は既に免除し居る向多し)

一時宜によりては出征者の幼児を定時より早く

登園せしめ、定時より後れて降園せしむると

(家庭の便利のために)

一 大阪婦人慈善會、愛國婦人會、浪華婦人會

一 愛愛扶植會等の従事しつゝある出征者幼児

保育所に對し、本會より相應助力すると

一 前項の事業のため委員廿名を常置すると

委員 小笠原松枝、高橋銀、氏原銀、清

水常次郎、膳タケ

一 市内幼稚園擴張の件は左の如く決す

(議案)

大阪市内幼稚園擴張に關する方法

高等女學校ハ土地ノ狀況ニヨリ保育科目ヲ置キ幼稚園ヲ附設スル様當事者ヘ建議スルヲ

一府立師範學校ノ學科ニ幼兒保育ニ關スル件ヲ加フル様其筋

(建議ノ丁削除)

一 二部保育ノ實施ヲナスヲ(可決)

一 保育室轉換ヲ實施スルヲ(可決)

一 本會ニ於テ左ノ二事業ヲ行フコト(時機ヲ見ルニ決ス)

(甲) 保育料ノ高キ幼稚園ヲ設置スルコト

(乙) 貧民部落ニ幼兒附托所ヲ設置スルコト

一 小學校令施行規則中幼稚園幼兒定員ノ制限ヲ廢スル様文部大臣ヘ建議ノ事(可決)

一 兼務園長ニ手當ヲ支給スルヲ(時機ヲ見ルニ決ス)

一 學校幼稚園ノ聯絡ニ付提携調査ヲ大阪市政育會々長ヘ交渉スルヲ(別ニ協議スルヲ)

一 左ノ諸項ハ意見ヲ發表シ漸次其實施ヲ期スルコト

(イ) 小公園ヲ各負擔區ニ造リ其所ニ幼稚園ヲ設置スルヲ(時機ヲ見ルニ決ス)

(ロ) 一 小學校負擔區ニ一幼稚園ヲ設クルノ習慣ヲ打破シ幼兒ノ多少ヲ量リ相當ノ幼稚園ヲ増設スルヲ(可決)

一 幼稚園ヲ學校ヨリ分離セシムルヲ(可決)

一 幼稚園設置ナキ負擔區ニ設置ヲ勧誘スルヲ(可決)

一 幼兒幼稚園成續調査ノ件ハ廢案トナス

以上

二月三日會員中の保母、集英幼稚園に會し戦時保育助力につき協議したるに、志望者頗る多く、結

局、會員三部に別れて、公務後日々保育所に出張
 することとなりたり、又中には會自ら保育所を
 造らんかと言へるもありたり (し、つ 報)

雑 報

女子高等師範 國語體專修科生の募集

別項廣告の通り、尙便宜のため試験心得及履歷書
 式を左に掲載すべし。

國語体操專修科入學志願者心得

- 一、出願期限及手續
- 一、出願期限ハ明治三十八年三月二十日トス
- 一、入學願書ニハ履歷書及本年二月一日以後ノ證明ニ係ル戸籍ノ抄本ヲ添ヘテ差出スベシ
- 一、入學願書及履歷書々式ハ規則所定ニル
- 一、道廳府縣立師範學校卒業生ニシテ服務年限中ニアル者及現ニ奉職中ノモノハ其所轄地方長官ノ許可書ヲ添ヘテ差出スベシ
- 一、志願者ハ本年四月一日ノ調ニテ滿十七年以上三十年未滿(明治

- 一、募集人員ハ三十名トス
- 一、入學試験ハ後記ノ日時刻ニ據リ當校ニ於テ施行ス
- 一、受験者ハ同日午前七時三十分マテニ出校スベシ

國語体操專修科入學試験日時刻

午前八時ヨリ全十時	四月四日 (火)	四月五日 (水)	四月六日(木)
午前十時ヨリ全十二時	体格検査	國語 文法解釋	午前八時ヨリ全九時
午後一時ヨリ	音樂 樂器使用	漢文 解釋	午前九時ヨリ全十時
		體操 徒手	全十時ヨリ全十二時
		國語 作文	歴史 本邦 外國

一、詳細ハ二月三、四ノ官報若クハ本校ニ就キ承知スベシ

女子中等教育講習科

神田橋外なる東京府教育會内東京女學講習會は、
 従來女子師範學校、高等女學校に入學を志望する
 もの、爲めに特に試験に要する學科目を教授し來
 りしが、今回女子師範學校、高等女學校の家事科

裁縫科の教員たらんとするもの、爲めに、文部省の檢定試験に要する適切なる學科目を選び、講習を開始し本年七月を以て結了の豫定にて、講師は塚本はま子(家事科)須磨さた子(裁縫實習)瀨下てつ子(裁縫教授法)新富藏(家事應用實踐化學)東基吉(教育)佐藤球(國語)岡田起作(習字)の諸君なりと云ふ

東京保姆養成所

幼稚園保姆養成の目的を以て、本月より開設せらる。場所は、神田區一ツ橋幼稚園内、六ヶ月を以て、完了すべく、修業年限四ヶ年の高等小學卒業の者を入學せしむべき由。時間は、毎日、午後三時半より六時半まで、月謝は一圓、入學せんとする者は、履歷書及入學金三十錢を添へて全所に申

し込むべしとの事なり。

會　報

常　會

明治卅八年二月廿五日第三十六常會を華族女學校幼稚園に於て開く、本日は特に講演を依頼せず各自の實驗談のみと定めたり、會員山田氏は某外國人の家庭に於ける兒童の同情に富める狀を話され、守山氏は同情に就き話を續けられ「セドリック」の話とて理想の子供の行爲に就き面白き話あり、次は後藤氏の幼兒の病氣を豫知する方法につき經驗談あり、岸邊氏平岩氏同問題に付き實驗を話され次に松村氏は「我子の惡徳」なる書物を丁寧に紹介せられ最後に一同手を取りて新案遊嬉を交換し面白く散會したり、

入　會　三十七年一月より
同　三月に至る

- 長門國阿武郡徳佐村　田村唯熊
- 神戸市本通四丁目十一番ノ二、宮嗣岩之助方　宮　飼　や　す
- 東京府千住幼稚園内　本會事務所申込　園　田　喜　代

- 横濱市足曳町二ノ一、私立吉田幼稚園　紹介東基吉　長谷川りん
- 紹介吉注幾久江

東京牛込加賀町一ノ二五、永廻万	紹介雨森劍	津田せん
東京本所區北二葉町三一、江崎方	紹介中房	三谷鏡
長崎縣佐世保市福田一一二三、	紹介堤哲子	磐井廣子
東京神田區仲猿樂町一七、	紹介和田藏	羽田由
越中國下新川郡南保村	本會事務所申込	谷斯文
鹿兒島縣幼稚園	紹介松村久	勝目かよ
東京牛込區矢來町三、中丸三一號	紹介下田鶴	山川二葉
横濱市山下町大同學校	紹介東基吉	林玉井
岡山市弘西幼稚園	紹介古田重	用瀬加代
四日市大字濱田四百九番屋敷	右二名紹介關壽賀	吉田しげ
四日市幼稚園内		東しな

會費領收
 自明治三十八年一月二十六日
 至全二月二十五日
 金額 年月日 姓名

三六〇	三五、二——三八、一	相良とく
三七〇	三五、一——三八、一	高木まつ
二〇〇	三六、五——三七、二二	印東音鳴
二〇〇	三六、一——三八、七	廣瀬たみ
一〇	三八、一	園田うめ
一二〇	三八、一——三八、二二	藤澤周
六〇	三七、八——三八、一	佐藤せん
四〇	三八、一——三八、四	田村唯熊
二〇	三七、七——三七、八	安西せい
一一〇	三七、三——三八、一	波多野あぐり
一〇〇	三八、一——三八、一〇	御園生よそ
一〇〇	三八、八——三九、五	拔山つき
一二〇	三八、一——三八、一二	下條ますみ
一二〇	三七、一〇——三八、九	小倉みき
三二	三八、一——三八、三	宮飼やす
一〇〇	三八、六——三九、三	鈴木はるえ
四〇	三七、七——三七、一〇	田淵みち
四〇	三七、二——三八、三	山下ふさ
四〇	三七、二——三八、三	土方ひさ
四〇	三七、二——三八、三	藤井とよ
西〇	三七、二——三八、三	酒井たね
四〇	三七、二——三八、三	渡邊のぶ
四〇	三七、二——三八、三	高松幾代

六〇	一三〇	二〇〇	二一〇	二四〇	二四〇	一〇	一〇	三〇	四〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	
三八、一——三八、六	三七、一——三八、一	三六、五——三七、二	三七、九——三八、一	三六、四——三七、二	三六、四——三八、三	三八、一	三八、一	三七、七——三七、九	三七、九——三七、二	三七、一——三八、一	三七、一——三八、一	三八、一——三八、二	三七、一——三八、一	三七、一——三八、一	三七、一——三八、一	三八、一——三八、四	三八、一——三八、四	三八、一——三八、四	三八、一——三八、四	三八、一——三八、四	三七、一——三八、三
武藤	高羽	杉村	儀俄	渡邊	星野	加藤	山本	柳原	三輪	樋口	藤谷	益田	井村	鈴木	田副	岩田	常川	尾村	鈴木	内田	齋藤
うめ	ふみ	松子	ふみ	こう	きく	萬代	るい	あさ	もと	いき	いわ	一枝	重代	ぎん	つる	ゆき	とよ	あい	やう	たね	のぶ

一〇〇	六〇	一〇	一二〇	一二〇	一八〇	一二〇	三〇	一一〇	一五〇	二〇	一五〇	五〇	二〇	二〇	二二〇	二二〇	二二〇	一〇〇	一〇〇	一二〇	一二〇	
三七、七——三八、四	三八、一——三八、六	三八、一	三八、一——三八、二	三八、一——三八、二	三八、一——三九、六	三八、一——三八、二	三八、二——三八、四	三八、二——三八、二	三七、五——三八、七	三六、一——三六、二	三七、三——三八、五	三八、二——三八、六	三八、一——三八、二	三八、一——三八、二	三七、八——三八、七	三八、一——三八、三	三六、七——三八、三	三七、一——三八、七	三八、四——三九、一	三八、一——三八、一〇	三八、二——三九、一	三八、五——三九、四
中安	土保	古田	甲斐	島關	關壽	杉本	津田	山川	清水	嶺ふ	松岡	勝目	田中	安野	福富	波佐	瀧山	寺島	伊藤	道口	谷新	小林
親子	かん	重	直枝	つね	翼	園	せん	二葉	きよ	ふき	くす	かよ	八重	なか	りき	みち	幸	得	みち	美智	文	千年

一〇〇	三〇	三〇	五〇	五〇	三〇	三〇	五〇	五〇	六〇	二〇	七〇	四〇	一〇〇	六〇	五〇
三二、二	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八	三三、八
山田ま	北野晴	伊藤いつき	吉田しう	坂元つや	高木すみ	土井たま	千葉秀	山中下枝	小野てる	深江とき	松島八重	妹尾明	羽田由	福井榮	山崎いよ
丸山かく	寺本みとし	村田よね	武藏とめ	瀧口慶子											

フレイベル會規則

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
 第三條 會員タルモノモハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ
 第四條 保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
 第五條 會員ハ本會ノ經費トシテ一月ノ金拾錢ヲ贈出スベシ
 第六條 本會ノ名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ム
 第七條 本會ノ特別ニ請ヒテ役員トナスコトアルヘシ
 第八條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 第九條 總會、保育參列品、幼兒成就物、展覽會、會務ノ報告、幹事
 第十條 談話、選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スル
 第十一條 コトアルヘシ
 第十二條 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之
 第十三條 ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
 第十四條 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以
 第十五條 テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經
 第十六條 ルモノトス
 第十七條 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 第十八條 前項ノ外本會ノ的ニ裨益アリト認メタル事件
 第十九條 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 第二十條 會長 會務ヲ總理ス
 第二十一條 幹事 會務ヲ補助シテ會務ヲ管理ス
 第二十二條 幹事 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 第二十三條 評議員 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮問ニ應ス
 第二十四條 第九條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 第二十五條 第十條 主幹ハ會長ノ特選トス
 第二十六條 第十一條 但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス
 第二十七條 第十二條 評議員ハ會長ノ特選トス
 第二十八條 第十三條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入
 第二十九條 第十四條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザ
 第三十條 第十五條 變更スルコトヲ得ス

女子高等師範學校教授 關根正直先生校閱
文部省中等教員養成所講師 友田宜剛先生編述

文部省檢定済 和裝美本全四冊

女子學 作文教科書

第一卷(四版) 定價 廿錢
第二卷(三版) 定價 廿五錢
第三卷(三版) 定價 卅錢
第四卷(再版) 定價 卅五錢
(郵稅各六錢)

本書は著者が前に女子高等師範學校在職中の實驗と研究とに成り同校國語主任關根教授の意見をも加へ秩序を整へ難易の度をはかり文の分解結合語句の斷續段落より、句讀點、送假名文字の誤り事實取捨の方法、紀行、日記、書翰、記事、敘事、論說、用語の注意、詩歌格言の解釋敷衍、美辭法の一般等に及び一々解説文例模範文をかゝげ簡潔と懇切とを旨とし編述せられたるものにして昨年の文部省の檢定を得し以來作文教授の改良に注意せらるゝ各高等女學校に於ては從來の徒勞を省かん爲め直に教科書に採用せらるゝの光榮を得たる良書也

東京市神田お茶の水
電話本局二九九九番

光 融 館

先年來歐米留學中の處昨年歸朝致し左の所に卜居
小兒、小學校兒童及中學校、高等女學校程度の生徒
の診察、療治並に衛生上に關する相談に従事す

診察及面會時間 午前九時より正午迄
(特別診察の外日曜日は休業)

東京市麴町區内幸町一丁目三番地
土手通り胃腸病院東隣(電話新橋四七四)

醫學博士 三島 通良

本年四月入學セシムベキ當校私費國語體操專修科生
徒三十名ヲ募集ス入學志望者ハ來三月二十日マデニ
願出ヅベシ尙詳細ハ二月三、四日ノ官報又ハ當校ニ
就キ承知スベシ

明治三十八年二月

女子高等師範學校

(號參第卷五第もど子と人婦)
 (行發日五回一月每)(行發日五月三年八十三治明)

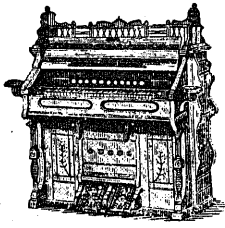
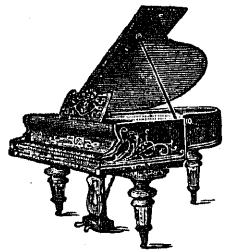
明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可

リセ領受ヲ牌賞等壹第テ於ニ會覽博國內回五第ハ琴風製葉山



山葉製風琴
 (附 險 保)

壹號	形金拾六圓五拾錢
貳號	形金廿六圓五拾錢
參號	形金拾七圓
四號	形金拾八圓
五號	形金拾九圓
六號	形金廿圓
七號	形金廿一圓
八號	形金廿二圓
九號	形金廿三圓
十號	形金廿四圓
十一號	形金廿五圓
十二號	形金廿六圓
十三號	形金廿七圓
十四號	形金廿八圓
十五號	形金廿九圓
十六號	形金三十圓
十七號	形金三十圓
十八號	形金三十圓
十九號	形金三十圓
二十號	形金三十圓
全形	號金四拾五圓
新形	號金四拾五圓
全形	號金四拾五圓
足折	號金廿五圓
全形	號金拾五圓



●山葉製洋琴 各金參百圓以上
 ●船來風琴 三百圓以上三千圓迄各種
 ●船來洋琴 五百圓以上五千圓迄各種
 ●金五圓以上各種
 ●十圓迄各種其
 ●他弓箱附屬品
 ●等各種
 ●船來各種
 ●樂隊用陸軍及弓箱各種
 ●戰捷紀念國旗印銀管樂器各種
 ●八人組簡易吹奏樂器一組金參拾圓
 ●右の外手風琴、ハルモニカ、和洋音樂書
 ●ヨールレット各樂器附屬品、和洋音樂書
 ●各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目
 ●錄進呈す



新刊音樂書

一ノ	オルガン、ピアノ	練習書	大形洋裝	定價金五拾錢	郵税金八錢
一全	第三篇露	營の	頗美本	定價金貳拾五錢	郵税金四錢
一第	二篇離	れ小島	頗美本	定價金貳拾五錢	郵税金四錢
一第	一篇須磨	の曲	頗美本	定價金拾錢	郵税金二錢
北村	季晴先生作	(第參版發行)			
一西	比利亞洲	地			
一滿	須	唱			
高須	治輔先生作歌	、本元子作曲			
一君	林廣守作曲、ノエルベリー先生和聲				

調律修繕